

442
272

日露
戦争
戦勝の原因

陸軍中將 阪井重季閣下題字
法學博士 戸水寛人先生序文
陸軍二等主計 藤村守美殿著

東京 兵林館發行

42-272

華東圖書公司



華東圖書公司

民國三十年五月
段丹重題



明治
40 5 2
内交

陸軍中將阪井重季閣下は貴重なる時間を割ひて本書の閲讀竝に題字を賜はり、萬朝報社々長兼主筆黒岩周六先生は病蔕中より陸軍歩兵少佐秋月伊豆意殿竝に萬朝報社々員山本秀樹先生は劇職中より種々の明教を垂れられ、陸軍歩兵少佐岡本茂若殿竝に陸軍歩兵大尉入交政克殿は最親切に本書の内容及出版の件に就ひて注意指導せられたることを誠心誠意感謝す

戸水法學博士は吾輩の東京帝國大學法科大學在學
中の恩師なり先生正々の論堂々の説固より愚著の
能く當る所にあらずと雖其の明教を空ふせざるの
意思を表せんが爲め敢て先生の許を得て卷頭に掲
ぐるここにせり

拜啓

度々御枉車被下難有貴著戰勝の原因に關し序文を徵せられ候に付ては早速之を草す可き筈の處目下種々の用事有之候に由り急に筆を執ること能はず去ればとて御命を受けたる儘に之を棄置くは不本意の至に御座候に付畧儀ながら手紙を以て聊か考ふる所を申述候

二十世紀の大問題と申さば甚だ仰山に聞ぬ候得共先づ二つ計有之と信じ候一は即ち社會問題にて東洋に於ても西洋に於ても科學進歩し機械發達したるの結果として資本家益々富み労働者益々貧きことは避け難き事情に有之候に由り貧富の懸隔を如何にす可きやとの問題は今後益々囂しきこと、存候他の一は即ち國力消長問題にて世界の交通機關迅速の勢を以て膨

六
脹したるの結果として萬國悉く其力の消長に注目し英米人の所謂 National Imperialism 獨人の所謂 Weltpolitik の議論到る處囂しく御座候此の時に當り我日本の如きは内は社會の腐敗せざる様に心を用ふること必要にて外は覇を世界に稱し得る様に國力を養ふこと必要と存候
先年日本は露西亞と戦ふて大に之を破り世界の迷夢を覺醒したることは甚だ愉快に御座候得共退て考ふれば之が爲めに大に列強の爲めに嫉まれ米國の如き善隣すら此の頃に至り漸々に日本人を排斥せんと欲するの兆有之候に由り苟も日本にして覇を世界に稱せんと欲するの心あらば此際速かに露國に勝ちたるの原因を研究するを要し候
幸にして貴君は此の事に思到られ業既に戦勝の原因と題する

ものを書かれ候貴稿御預り申候際其一斑を讀みたるのみにて未だ其全豹を窺ふの暇を得ず候得共貴君の慧眼なる早既に戦勝の原因を研究せられたるは小生の大に敬服する所に有之候に付何卒速かに之を出版に付せらるゝ様希望仕候
敢て此手紙を以て序文に代へられんことを願ふ次第に無御座候得共聊か所考を陳じ候早々頓首

明治四十年二月一日

戸水寛人

藤村守美様 侍史

自序一

吾輩不敏、今回空前の大戦役に従軍の光榮を擔ひ二歳の長期間
戰場に在りながら、未だ能く帝國歴史の一行だに記載せらるゝ
の微功をも樹つるに至らずして、倏ち國軍凱旋の餘澤に浴する
と成りしは寔に恐懼措く能はざる所にして、彼の赫赫たる偉
蹟千載不朽の美名薫しき生故兩方の知己戰友に對し亦固に慚
愧禁ずる能はざる所たらずんば、然れば時期既に後れた
り、雖強ひて己み難きの心遣りに、我戰勝の原因の決して偶然
ならざりし所以を探究し、一には陣歿將士の英靈を弔ひ、二には
其の骨肉遺族を慰め、若し爲し得べくんば凱旋將士今後の大盡
忠大報國に裨益せんと欲し、僭越ながら、敢て本著述に着手せり。

本著稿成つて月餘猶ほ筐底に在り、戦役の論功行賞漸く進んで、思はざりき微身亦優渥なる君恩の餘光を拜し、顯勳將士の列末に在らんとは、恐懼又慚愧又々感激止まる所を知らず、乃ち遂に右の衷情素志を實現して希はくば皇化の萬一を補はんご決心し、奮然起つて本書を公表することせり

明治三十九年十二月

藤村守美頓首謹言

自序二

私は明治三十七年五月以來出征して我滿洲軍の凱旋まで戦地に留まつて居つた調子だから我國民的精神の最熾盛に發現したる軍國內地の狀況は目撃するところが出来なかつた又終始第十一師團内に勤務して居つたものだから戦争の全局に亘りては見聞したる所實に少いのだ殊に又肩書の示す通文學科學及び戰略戰術に關する智識は至極淺薄なものだから本書の所論固より正鵠を得て居るまい且つ南海の僻境に在りて筆を執りたることゝて大都文淵の巷に時めく大家の論說の如く雄大莊麗なることは出来ないが唯斯種の著述未だ世上に多からざる様思はるゝものから請ふ隗より始めんと挺進して拙作を提供したのである若し幸にして千金の馬骨ならば固に望外の光榮

だ

尙ほ此處に特に讀者諸君の注意を請ひたき次の二箇條がある
 一本書の論説は上にも述べたる通り至極淺薄のものではあるが猶ほ立論起説
 の根據を多種の方面に置き政治家的文學者の科學者の軍事家的觀察を綜合
 調和したること

二本著露西亞に關する評論解説は事實の證明以外悉皆戰前若しくは戰時中の
 露國及び同國民に對する當時世上識者の意見と信せられたるものにして固
 より現在の和親國たる露西亞大帝國に關するものにあらざること

明治三十九年十月

著者謹記

日露戦争 露國の勝利の原因

目次

總論.....一

第一章 政治上勝利の原因.....二

 第一節 大々的義戰.....二

 ○無名の軍は敗る○我邦は尙武國である○滿韓兩國民の保安
 ○帝國の自衛.....二

 第二節 世界の同情.....九

 第三節 露國々民の戦争觀.....一一

 附言 戰勝と立憲政體.....一一

第二章 社會上勝利の原因.....二四

 第一節 我日本國社會組織の基礎は堅固である.....二四

目次.....一

第二節 露國々民の人種、言語、文學、宗教、歴史、風俗習慣、地利經濟……二八

第三節 中等民族……四三

附言 戦勝と農民功徳後援團體新聞雜誌

第三章 歴史、道徳及び教育上勝利の原因……四八

第一節 我國體と國民的思想と史的觀念……四八

第二節 和魂漢才、士魂洋才……五二

第三節 家庭的及び社會的教育……五四

第四節 露國の歴史、道徳、教育……五六

第四章 天時地利上勝利の原因……六二

第一節 人心和すれば天心應ず○農作の豊凶……六二

第二節 兵勢得地而伸、失地而屈○西比利亞鐵道……六四

第三節 地理に關する精神的影響……六六

第五章 軍事上勝利の原因……六九

第一制機先……七〇

第二制海權……七二

第三優勢の戦闘力……七五

第四守勢及び攻勢、要塞及び軍港……七八

第五防禦工事殊に旅順口及び浦鹽斯德と各地戦争……八一

第六文と武……九〇

第七上村艦隊……九四

第八健脚(行軍力)……九七

第九機密圖書、多數俘虜、偵察搜索……九八

第十黒色、灰白色、カキ色……一〇二

第十一散兵戰術隊、附將校夜間戰鬥、負傷者運搬……一〇四

第十二將帥、大決心、建制部隊、海陸軍協同……一一一

第十三兵器、彈藥、器械、武技(教育)衛生、經理、兵站、内地諸機關……一二三

日露戦争 戦勝の原因目次終

日露戦争 戦勝の原因

陸軍二等主計 藤村守美著

總論

戦勝の原因如何と問へば、申すまでもなく

我允文允武なる 大元帥陛下の御威徳に由り、上下和協舉國一致、天佑を保ち、神助を有し、陸海軍の精銳を遺憾なく發揮し得たるに外ならずと恐察し奉ることなれど、然も其の和協一致、佑助精銳の鞏固妙用、進歩を誘致したる所以の從因及び其の和協乃至精銳の如何なる素質に成り、如何なる順序を經、如何なる形式に於て現はれたるか、と云ふ見立に就ひては、即ち世人が戦勝の原因如何と云つて嘩しく騒いで居る所だが、或は種々の揣摩臆説を弄し、或は説明の繁簡を失するの嫌なきにあらずで、孰も的確不動の理論を以て一目瞭然と云ふ様に解釋したものは、私の寡聞なる所以であるか、未だに見當らない。其れで彼等の解説釋論したる所を虚心平氣

に聴ひて見ると、言々句々皆誤謬なり、不得要領なりと言ふ譯ではなければ、構想
斷定が支離滅裂で系統結極を得ないし、稀に是は奇抜な意見だと思ふものも、所
謂管中窺豹の類であるから、事理の全局を撮ることが出来ないし、愈々聴ひて愈々
迷ふの觀なきを得ずと云ふ次第である。凡て事物の眞理を萬人に説かんとするに
は、先づ説く者自身に於て明快なる頭腦を有し、或は分拆的に、或は綜合的に、自由自
在物理を玩味し、鍛練熟して後之を出すに於て、聴く者をして恰如探囊中物の
感を得せしむる様にせねばならぬ。霞の中より物を觀たり、靴を隔て、痒き所を搔
く感じをさす様ではいかぬ。其れで私は單刀直入戰勝の原因は、第一政治上、第二社
會上、第三歴史、道德及び教育上、第四天時、地利上、第五軍事上の五個條件に存在する
ものなることを提示し、以下順次此等に就ひて説明を施し、我所信を述べ、併せて世
論の當否を辯ずること、しようから、諸君も其の積で聴ひて居られたい。

第一章 政治上勝利の原因

第一節 大々の義戰

無名の軍は敗るとは古き諺であるが、之は今日に及んでも猶ほ革むべからざる眞

理で、古來着々其の實例を示して居る。他に特別の事情の存在するが爲め、百が百な
がら皆と云ふ譯にはいかぬけれど、原則として決して誤りなきものである。或は眞
實正義の軍たりとも其の宣戰の辭禮宜しきを得ざるが爲め、恰も無名の軍なるが
如く見ゆるものは矢張敗れて居り、實質上正義ならずとも形式上無名ならざるが
如く裝ふものは亦善く勝つて居る位だから、出師運動には名義が至極大切なるも
のである。其れで形實共に美なるものは、他に大なる故障なき限り必皆勝を得るこ
ととなる。今此の定規を日露戰役に當てはめて見るに、無名の師を起したる露國の
敗れて、正義の實美名の形を具へたる日本軍の克ちたるは、至極最も理であつて
敢て論辯を費すの要がない譯合だから、今は唯幾何程まで露國が無名であつたか
日本が正義であつたかと云ふ事を述ぶること、しよう。

我邦は人の善く言ふ通武を尙ぶの國柄であるが、一體武とは何であらう。之を文字
的に云へば、戈と止との二字より成つて居つて、戈を止め戰を已め亂を撥むるの意
である。詳言すれば、惡黨あつて人を傷け、叛徒起つて國を紊り、強暴の國あつて貧弱
の他國を侵略する等の事ある場合、義俠難に赴き、身命を捨て、義軍を起し、國運を

四
堵して威力を揮ふのが武の真意である。其の人を言へば武人で、其の國を言へば武國で、然様の人氣國風の在るものは尙武國である。其れだから武の反面には、武人自から不義の争闘を爲し、武國自から無名の出師を行ふことを許さぬ意味が含まれて居るので、必や戈を止むるが爲めに戈を執り、兵を戡むるが爲めに兵を用ゐる、戦を收むるが爲めに戦を作すと云ふ順序で、眞に已むを得ざるに出でたる戦闘行爲でなければ武と稱することが出来ぬ。然れば武とは忠勇信義禮節など云ふ美德を包含するものであるから、日本も尙武國と謂ふ以上此等の諸徳を具備して居らねばならぬ。好戦國と謂はざるからは戦に強き計りでなく、大に道德觀念の發達した國柄でなければならぬ譯だが、日本は今回の戦争に於て惟に其の名を汚さつたのみでなく、復更に其の美名を顯然と發揚した。何故かと云へば、日本の出師の目的は、恐れながら宣戰の大詔に明かなるが如く、貧弱なる韓國の扶持並に韓國と接壤する滿洲の保全と云ふ事に在りて、東洋の平和、帝國の自衛の爲め、千萬已むを得ざるの勢に出でたる所謂義戰であるからである。昔より義戰と謂はるゝものは餘り多くはない。西洋で云ふと、耶穌教の信徒が、基督の誕生地たるジェルサレムを異教徒

の蹂躪より救済回收せんとて起したる十字軍の役、文明世界最極の罪惡とも云ふべき奴隸制度を打破せんが爲め開始されたる北米合衆國南北戦争、支那で云ふと、殷の湯王が天に代つて殘虐なる夏の桀を伐ち、周の武王が億兆の心を酌んで一夫の殷紂を誅したる事蹟、日本で云ふと、稍々澤山あるが、先づ楠正成の勤王軍、上杉謙信の河中嶋出陣などが其の著しきものであらう。然るに此等の義戰も近頃の二大戦役即ち明治二十七八年の日清役及び今回の日露役に比較するときは、其の義戰の義戰たる所以の容量實質詳言すれば形勢の雄大なる、旗色の鮮明なる、名義の順當なる諸點に於て、月籠の差雲泥の別ありと云はねばならぬ。果して然らば此等大戦役の眞に義戰たる所以は、那邊に認むべきか、明治二十七八年の日清戦役に就ひて今日此處に喋々論辯するの要はないから、單に其の義戰たることを明言し置くに止め、専ら今回の日露戦役に就ひて其の然る所以を詳説しよう。

抑も日露戦争は普通の所謂義戰とは異なりて、個人の責務上より、國家の存立上より、人類の康寧福音より、世界の光榮平和より觀察して最も明確に、最も圓滿に義戰たるの性質を具有して居るので、手短に言へば國民的義戰、世界的義戰と稱へらる

ゝものである。何故かと申せば、戦前の露國は亂暴なる劍術家道德心なき俠客の如く、徒に戦を好むの國風であつたのみならず、近世流行の弱肉強食主義の一點張で、人を殺し、國を亡ぼすのを何とも思はず、平和の攪亂者なりと難せられようが、人道の破壊者なりと訾られようが、國際法違反者なりと責められようが、馬の耳に風と聞き流し、國として亂暴なるのみならず、國民としても然り、個人としては尙ほ更と云ふ調子で、軍隊に規律なく、將卒に德義なく、一方に國家的悖德として、世界一統など、不都合極まる空想を抱き、大膽にも之を實現せんと企て、人の國を奪ひ、人の土地を侵食し、他方には人類的不義として、渴則飲盜泉、水の流義で、供給の不足する場合は他人の物に據らんとし、小人者轉嫁忿怒の流義で、内に不愉快の事あらば之を弱者に向つて濫發せんとし、到る處行く處民家を焼き、財寶を掠め、婦女を辱かしむるの有様であつた。其れで日本が博愛義俠の精神に顧みて黙し難く、猛然起つて其の悖德不義を世界に告白し、干戈に訴へて大捷を博し、依つて以て滿韓兩國國民に康寧福音を享有せしめ、極東の光榮平和を挽回煌耀せしめたること、之を人類の上より、將又世界の上より觀て一大義戰と稱揚讚美するも、決して過褒と言ふことは出

來ぬ。否寧ろ斯く稱美した位では物足らぬ心地がする程だ。次に又戦前の露國は、思ふ事一ツかなへば復二ツ三ツ四ツ五ツ六ツかしの世やの俗歌の通の心持遣方であつたから、滿韓二國の滅亡したる日は、哈爾濱を政治上の首都として、南に旅順北に浦港の二大根據地、陸兵十萬、艦艇百艘、朝鮮は米穀魚鹽の利を供し、營口、大連、安東縣は北大平洋の商權を支配するの勢となり、二十世紀の劈頭東亞の一局面に厯然たる大帝國を現出すると共に、三ツ四ツ五ツと蒙古、西藏、支那本部の蠶食に取掛らうが、同時に「六ツかし」とは知りながらも我日本の鼎重を窺ふであらう。其の時は王孫滿然たる豪傑も出で來て、蘇張の辯舌を揮ふだらうが、彼の當時の露國は周時代の楚王とは違つて、天下の道義や萬國の公法やで括れそうもない有様であつたから、然様な口先の仕事では、如何にも御尤もと引き下る筈がない。其れで交渉とか、要求とか、協議とか、讓歩とか、謝絶とか、強請とか、騒ひだ結局、遂に擴大長期猛烈慘憺たる大戦争を惹起すに相違ない。して見ると今回の日露戰役は、宋朝の大文士蘇老泉の句調を藉つて云ふと、思近而小なるもので、之を以て未來必や起るべかりし戦争の患遠而大なるものに比する時は、此の上ながらも先づ仕合であつたと云はなけ

ればならぬ。斯の通りの次第だから、日本が自國本位より觀る時は聊か後れたことではあるけれど、未だ患の遠大ならざる中、換言すれば恐るべき東亞大帝國の成立せざる中に、彼の陰謀野心を打撃破壊に歸せしめんとて、天地を動かし鬼神を泣かしむる忠愛の至情を滿身に迸らして將士の勇戰奮闘したる國民の粉骨盡瘁したる大戦争は、之を個人の責務上より、將又國家の存立上より觀て、一大義戰と稱讚せらるべきもので、之を古今數多の所謂義戰なるものに比較するに、唯此の點だけでも優ること萬々である。况や前に縷々陳述したる通、世界人類の平和幸福の上より觀察して東西比類なき義戰たるからは、最早此の上更に繰返して斯の戦争の性質を説かなくとも、事理純白一目瞭然、渾圓球上萬邦の政府人民をして暗中に烽火を認むるが如く、名實共に至美至善なる大々の義戰であつたと云ふことを了得せしむるであらう。斯の通開戦の動機並に目的に於て善美を盡し、正義を得、所謂名正而言順で、旗幟を鮮明にし、戦場の將士、後援の國民をして向ふ所を知らしめ、養勇以直で、人道の觀念、殉公の精神の上に、尙武國の銳氣を發揮せしめたから、百戰百勝破竹の勢で進んだのであるが、然し其の名の美しく、義に富む武徳の發動は、尙ほ次に述

べんとする偉大なる効果を結んで居る。

第二節 世界の同情

熟々古今大事業の成敗を鑑みるに、單に一個人の頭腦手足で仕上げる事業ならば、兎も角、多人數の協力に成るものは、唯に其の事柄が實質上正しくして、愈々出來上つた時は、善い物であるからと云ふ丈では成功すること覺束ない。必や其の形が美々しくて、最初より人氣を得、世評を博すると云ふ様でなければならぬ。然なくてはよしや、多き苦勞の後に幾分か成功するとしても、其の初期に於ける失敗の爲め遂に終はりまで思ふ様に行かず、或は中道にして廢止せんかと狼狽するものだから、益々不結果に陥るものである。形の美々しからず、人氣世評の盛ならざる事業は、總じて其の傾きがあるから、設令眞實斯くくである、其の初期に於て如何に不景氣であらうが構はぬ、世の噂は顧みるに及ばぬと云ふ譯にゆかぬ。殊に戦争と來ては、土臺が氣勢に成る仕事だし、發明發見の事業の様に死物に對するものとは異なり、智巧あり政略ある活物相手の事だし、尙ほ更然りと云はなければならぬ。其處で今回の戦争に於て日本は如何様であつたかと云ふと、形の美しかりしことは問ふ

までもないが、之は既に業に前に詳論したから、是より後は斯の事及び實質の善美の發顯に由りて産出されたる人氣及び世評に就ひて説くことゝしよう、尤も今度の戦は前にも述べたる通、元々自衛的國民的戦争と呼ぶべきもので上下億兆協力一致の上に始められたることなれば國內の人氣世評などは云ふ丈愚だ、斯様な言葉を用ふるさへ既に不穩當だ、其れ位であるから斯の點に就ひて云々するの要なきのみならず、是迄色々論説した所々で同文字同語句は表はさざつたにせよ、其の意味合は丁重に話したことであるから、今は唯世界の人氣評判、一口に云へば世界の同情如何に關して手短に物語することゝしよう。

日本は開戦の動機並に目的に於て美名、正義、優勝を得たるのみならず、其の宣戦前及び戦時中の行動に於ても亦武徳を汚さざつた、何故かと云へば右の如く開戦の理由の公明正大なるにも拘はらず尙ほも容易に戦に至るを欲せず、務めて之を避けんと願ひ、彼の頑強陰險極まりし露國を相手としながらも、猶ほく信義を經とし、禮節を緯とし、勘忍又勘忍、出來得る丈、否寧ろ出來難き部分までも讓歩して談判に臨み、復其の既に已むを得ずして談判を中止し、外交關係を斷絶して交戦に至れ

る後も、矢張宣戦の主旨に鑑み當初の精神を失はず、一に國際法に則り戦規を守り、人道に顧み博愛の心を捨てざつたからである、斯様な次第であるから、日本の行動は先づ交戦地たる滿韓の住民をして悦服せしめ、滿韓兩國の政府をして信頼せしめ、遂に敵國軍人さへも我高風温雅を慕ひ恩義仁恵に泣かしむるに至り、世界の同情は翕然として東海の君子國に集まり、敵の盟約國和親國すらも漸次好意を齎らし來ることゝなり、敵國其れ自身の全國民も戦勝者たる日本を怨みずして、反つて自國當然の敗北なりとあきらむることゝなつたのである、是に於て我は一戦一勝毎に銳氣を増し、度胸を据へ、思ひ切つた遣方に出でて、鄙陋なる小刀細工を弄せぬから、列國の尊敬を受け好意を得、外債は成功するし、軍資は豊になるし、國民の決心は固くなるし、士氣を鼓舞振作するし、遂に稀有の大勝運を開拓したのである。

第三節 露國國民の戦争觀

右層々説き立てた所で、日本に於ける戦勝の政治的原因論は充分明になつた様なものだが、戦争と云へば一人仕事でない角力であるから、相手方の力量如何を見ねばならぬ、我に大量あるとも、若し先方に更に大なる力量ある時は梅ヶ谷が常陸

山に破らるゝ様なもので必しも我の勝利と云ふ譯に參らぬ。又反對に我に然程の力量なしとするも先方の力量一層劣勢なる時は小童が老人と闘ふて勝つ様なもので亦必しも我の敗北と云ふ譯にならぬ。して見ると前に種々掲げた日本の勝利原因論が誤らざるか否、又誤らずとするも今回の勝利の意想外に立派なりし所以の道理を知るには、露國敗北の必然的事由を探究することが至極便利であらうと思ふから、大略説くこととしよう。

無名の軍は敗ると既に日本に名正而言順なる理義ありとすれば天秤棒の兩端、銜と物體との關係見た様に、反對の側に立つ露國に不正不順の缺點存在せねばならぬ筈だから、到底鋭敏なる世界列國の耳目を奪ふとは出来まいが、或は巧言舞文善く自國國民を欺き、戦場の將士を勵ますとは不能なりと云はれぬ。然らば彼の國民及び軍人の戦争觀は如何であつたかと尋ねれば、此の事も前一寸話して置いた通り交戦後漸次分明に成つて來た。即ち彼の軍人は我恩義に感激し、彼の國民は日本の大勝利を嫉怨せぬと云ふ事を以て充分に推量せらるゝが、猶ほく是丈に止まらぬ。何故かと云へば、此の二つの事實あると共に、更に復彼等の心は彼の政府よ

り離れ、或は寧ろ其失敗を歡ぶの風が起つて來た。斯の事情は露國に取つて大變な苦痛であつたが彼露國は流石歐洲の怪物と呼べるゝ丈で殆ど常識を以て想像し得られぬ不思議な事件に満ちて居る所だけれど、善くく觀察を遂げて見れば這般の真相を悟了することが出來、勢の轉ずる所寧ろ當然の理合であるぞと思はるゝ。何故かと聞くと、一體露國々民は愛國心がないではないが、歴代の政府は頗る專横で、人民を大切なる國民として愛撫せぬ、其の賤しき地位に在る者は人間としての取扱も受けぬ調子であるから、上下官民の睨離反目甚しく、從來既に已に紛紜騷擾の絶間なき有様であるが、國政の大方針たる宜俾民由不可使知之主義が今回の戦争にも適用せられた結果、直接には國民の戦争其の物に對する惡感情を激成し、間接には對政府離反の意思を増進して遂に非戦觀を促したのである。其れで今此處には餘談を省略して、専ら此の主義の特に今度の戦争に使用せられたる理由並に結果を話すこととしよう。然様すれば餘の細々しき事柄は自然明瞭に成つて來ると思はるゝ。又斯の點は甚重要なる關係があるので、露國側になつて見ると敗北の唯一原因と見らるゝ程の事だから、注意して聽ひて貰らわねばならぬ。

是に於て第一着發問すべきは、何故政府は國民に戦争の性質因果を知らさうつたかと云ふ事であるが、元より普通の政治事項と異なりて國家非常の變體に屬し、專斷強制の一點張では成功せぬ。必や國民の好意を得熱誠を求めなければならぬと云ふ考は彼の國爲政治家の頭腦にも起つたに相違ないが、畢竟するに己等不正行爲の結果招きたる戦争であるから、正々堂々と天下に告白することが出来ぬ。正當防衛に抗對する正當防衛権はない。日本が露國の不法行爲に當るが爲め起したる義戦に向つては、更に義戦論を振廻はすことは出来ぬ。之を個人間の争闘に比較して云ふと、拔刀で斬り掛つても刀尖の觸れぬ中は罪がないと云ふ道理はない。何かの故障の爲め斬付けざつたにもせよ未遂犯は成立するし、之に對抗すべき正當防衛権も發生する。して見ると、露國が盛に戦備を整へて將に發動せんとする危機一髮、疾風落雷、抜く手も見せず打込まんとする一刹那、日本が機先を制して旅順艦隊を襲撃したるは、敵の劍尖が我身體に達せんとする瞬間に電光石火一本参らしたもので、正當防衛の極純粹なるものだ。宣戰の布告がない中に軍事行動に出でたなど、非難するものは、寔に愚にも附かぬ事だ。拔刀を振上げて來た者に對して、研るぞ突

くぞの懸聲が、いるものか、直ぐに研つたり突いたり何でも此の方の勝手氣儘、其れこそ眞の自由行動だ。其れで這般の問題は、専ら古今の戦例や國際法の學說を藉らなければ辯明の出来ぬと云ふ事柄でなく、全く常識を以てするも、日常生活社會の習慣を引用するも、將又一般の法理殊に正當防衛権の本領に參照するも、皆共に解決せらるゝ譯だ。話が、大分横道に入つて長くなつたが、要するに右所説の通りの道理だから、日本對露國の開戦前の軍事行動豫告必要論は、惟に各國を動かす能はざりしのみならず、自國々民の敵愾心を鼓舞するの資料とさへもならず、外交關係斷絶の責任論などは、尙ほ更の事。若しや實戦は日本が開始したと先方の御注文通甘受すると假定するも、猶ほ其の茲に至れる所以の罪責は、全然彼の負擔に歸する次第だ。其れであるから彼の國主權者も、唯儀式的の宣戰布告は發詔したが、甚氣焰揚がらず頗る不得要領で、一も肺肝より出でたるの言なく、一讀懦夫を起たしむるの概を見なかつた。先づ斯く云ふ都合だから、彼の政府も敢て事實の真相を國民に知らさんとせず、否、寧ろ知らさうらんと務め、新聞雜誌の記事を嚴重に取締り、民間の演說集會を制限束縛したが、之が爲め多數の國民は重大なる極東の形勢に關して、

何の事だか薩張通せず、唯或は茫然として幾多の月日を空過し、或は轟然として政府の方針を攻撃するのみ、國家の安危存亡に關する大事件に對し、冷澹ならずんば忿怒する、忿怒せずんば歎息するのみで、更に感奮興起身命を祖國に捧げんとする者一人として得られぬと云ふ不體裁に終つた所以である。

然れど尙は一ツ此處に研究すべき問題がある。設令無名の軍、開戦行爲の責任論は面の當り右所説の如しとするも、既に戦争の出態した以上は、幾分か無理にでも、目前の事實を見て、之に對する相當國民の決心を固め得べき筈、又不正不義たりとも略地收利の大望を披露し、勝敗の效果得失論を口實として民心を收攬鼓舞すべき筈なるに、遂に斯の事さへ爲し能はざりしは抑も何故であるか、之も一應奇態に思はるれど、再顧三考する時は、容易に解釋の出來る疑問だ。成程戦の始まつた後、猶ほも國民の奮勵せざるは、恰も天上に唾すると同様、兎角彼等の不利不幸となることは云ふ迄もない事で、彼等も之を悟らざる程の愚物ではない、否寧ろ彼等は割合に利口であつて、其の大なる不利不幸も、彼の奮つて戦に勝ち、勝ちて土地を取り利源を得、之を保持經營し、依つて以て政府の權力を増し、聲望を揚ぐるの大々的、不利不

幸に比較する時は、猶ほく、遂に些少なりと云ふ事理を呑込んで居るからである。何故かと云へば、數多の人命を損し、巨額の軍資を費して戦に勝ち、目的通美土富源を得た所で、日本の之に對する一葦帶水呼べば應んとするの交通至便の關係とは事違ひ、彼の本國からは數千哩の遠方に在るので、其の恩霑に與る者は國民中の極少數に止まる。英國が英獨の様な世情民習であつて、國外の遺利を索むるのを職業とする人民が多ければ、従ふて戦勝の利益を蒙る者が多くなる譯だが、彼の國民は元々其の柄でないから、然様都合善く參らぬ。其れで一般に云へば、右の所謂利益は眞に利益とならぬ。恰も月世界の金山見た様なもので、懐かしき故郷を出で、漫々然と遣つて行くならば、古き昔佐渡の金山を堀りに行つた者が、一年待てどもまだ見へぬ二年待てども、まだ見へぬと歌はれたと同じ身の上になるを恐れて居る位だから、戦争は骨折損のくたびれもうけ、勝つても負けても共に不利不幸だが、奮發して都合善く折節でも勝つと云ふことに成つて、此の次はく、と空頼して、戦争が長く續く様になれば、骨折諸共大損である。下手な將棋差を見物して居る者が、早くさつさと負けて、已めれば善いがと思ふ様に、敗戦又敗戦で、短く、小さく切上げたいと

望んだ位だから、冷澁に成つたのも實に已むを得ざる譯合だ。次に又彼の國民中の或部分即ち激烈なる政府反對黨連は、前者の如く單に相當程度の敗戦を爲し而も甚大なる不幸に陥らざる中に、早く平和の克復せんことを願ふ位に止まらず、寧ろ成べく長く戦争の繼續して、大敗北に大敗北を重ねて、政府が天下の怨を受け、足腰の立たぬ様になるのを願ふて居る者等である。之は主戦論者とも呼ばれ、戦争熱心家とも稱へられぬことはなからうが、普通の意味で謂ふ主唱者熱心家ではないから、日本では戦勝の報到る毎に拍手掲采したが、彼等は戦敗の報到る毎に拍手掲采した調子だ。斯様な連中だから、開戦前に於ては固より非戦論者であつた。其れは言ふまでもない、勝敗の見定め付かず、或は不幸にも自國の勝利となり、一方には數多の人命財力を犠牲に供すると共に、他方には政府の威勢増進して專横壓制の益々甚しからんことを恐るゝのである。日本などゝは丸で反對、恰も赤道の兩側で氣候の違ひ、地球の各半で晝夜の異なる様な正反對の有様だから驚くではないか、其れで愈々開戦となつて、自國が瀕りに負け始めると言動云爲俄然として一變し、陽に戦争を激勵し、陰に敗北を工夫すると云ふ奇態な事を遣つた。其の漸く進んで政府の

威勢衰へ、復人民の忿怒盛なるを見るや、時到れり機來れりと勇躍拊舞して政府顛覆革命煽動の大仕事を遣出し、其極遂に自國をして郡邑は騷擾、軍紀は紊亂、戦争は全敗、公債は暴落、内憂外患交々至るの悲況に沈淪せしめた。

以上は露國多數の國民及び突飛な黨輩に就ひて話したが、露西亞とても斯様な不忠者厄介者のみではない、盛名あり資産あり學識あり而して善く時務を知るの俊傑なきにあらずだが、此の輩とても全然戦争を非認し、早く平和の到來せんことを希望するものだから、固より敗北を幸便とするではないが、然ればとて積極的に軍事に奮勵することはない、其れは亦如何なる所以か、斯の派の意見は流石で聊か込入つて居る。純然たる國是論民福論から割出されて居る。即ち國土の延長富源の取得は滿更悪しき事ではない、將來に於て國利民益の一大方便とならうとは思つて居るが、彼等の胸中を遠慮なく推測するに、彼の朝鮮と云ひ滿洲と云ふ地方が、大戦争當然の結果として、數多の人命財力を費してまで獲得せんければならぬ程の價值を有して居らうか、よしや然程の價值を有して居るとするも、今俄に急ぎ立てずして幾分か都合善き時機を見計らうても悪しかるまい。又戦争と云ふ様な激烈

なる手段を用ゐなくとも、稍々穩當なる或は純粹なる平和的方便を以てして望を果すことが出来ぬとは限るまい。若し一步を譲つて主戦論者の意見の如く、如何程の勞費を投じた處で、猶ほ其の差額の利益が多なりとするも、之れが爲め列國殊に日清二國との關係が甚だ面倒に成つて來るは鏡に懸けて見る如しだ。彼の大言壯語是快とする連中は、滿韓二洲を領有すれば、直に之れを根據として清國を侵略し、日本を壓倒する其れが寧ろ主眼だと云ふであらう、如何にも其の通だらう、然様なくしては今度遣らうと云ふ戦争は値段が高すぎる。然れど其の希望は近頃餘り類のない程の空想ではあるまいか。假令一時は似寄た芝居が出来たとするも、其の後の損益成敗は如何なることか。今より想像し得られぬ様の思ひがする。何故かと申せば、支那は、誰も知る通り廣大なる邦土に、頑愚狂暴なる而も割合に社會的團結力の強い人種の充滿して居る所であつて、時に風雲を叱咤する底の大豪傑が澤山に崛起し、激烈なる革命叛亂を頻繁に遣る國柄だから、如何に天賦の利源に富んで居つて、之を得れば至極結構と云ふ理由があるにしても、之を統治収益するのが頗る困難である。殊に日本と來ては、尙ほ一層の事、大小數千の島嶼洋中に散在し、其の上

に、古今比類なき強健熾盛なる愛國心を享有せる民族が住んで居ることだから、其の治安政策に對しては、是迄總べて陸地續きの而も多くは蠢愚なる蠻民の遊牧所就中西比利亞中央亞細亞などを相手として居つた露國の全く初陣とする所で、成功頗る覺束ない。其れで此度の戦争は之を以て單に滿韓二國を獲得するにありとするも、將又一步を進めて日清兩國まで屈服するの土臺を築くに在りとするも、共に考へ物、或は寧ろ一期間持重して時運の開轉を待たなければならぬと考へらるゝ事だが、更に百尺の竿頭論歩を進めて深察熟慮するに、設令手易く滿韓兩地を攻取すべく而も此等を以て後日大計畫の土臺とするの意思なく、單に國權を張り民利を擧ぐるに資せんとするも、猶ほ一當今内外の趨勢に鑑みて戦争を好観することが出来ない。熟々露國の現狀を通覽するに、是迄既に獲得したる土地頗る廣大にして、其の維持開發改良の業務殊に西比利亞縱貫鐵道敷設、東亞露領各州海陸經營の爲め、多大の勞費巨額の資財を投じ、其の結果として重稅苛斂連りに加はるの慘狀に瀕して居りながら、業未だ半に至らざるの有様である。其れで先づ今日の處、大袈裟なる新設營は暫時差控へ、一方には半成の事業を完結する様努力すると共

に他方には正に大に民力の休養を計らなければならぬ。幸にして尙ほ餘力あらば宜しく先づ封内の秩序を立て、社會の改良を策し、國民の統一を務むべき形勢に在るにあらずや。夫れ之を思はずして濫に不急の外征、至難の兵争を行ふとは抑も何たる暴舉ぞ。聞説日本は近頃海陸の戦備頗る整ふて、前の明治二十七八年日清戦役時代に倍蓰するの武力を有し、一舉して三十萬噸の艦隊を遼東の沿海に集中し、再舉して五十萬の大軍勢を滿韓の境上に送遣すべしと云ふて居るではないか。然るに今日露國の極東に於ける海陸の兵勢は、漸く日本の半に達せるに過ぎずして、而も單線の鐵道を運輸交通、其の他軍事行動の唯一機關として事を舉げんとするか、遙遠五千哩の外本國の衆を恃むことは出来ない、抑も露の強勢を以てして能く萬邦を威壓する所以のものは、寔に善く其の強勢を保持涵養して、熾灼燼耀せしめ、而も輕舉濫發せずして、偶然の敗不測の怨を招かざるに基するのではないか。廟堂の肉食者流遂に之を悟る能はざるやと痛歎長大息したらしく見ゆるが、此の政派は先づ穩健なる内治論者どもも稱へらるゝ者で、上にも云へる如く有力なる社會に屬する連中だから、割合に小數ではあるけれど、其の達識なる論旨高潔なる行動は

暗々裡に全國を風靡した様である。

凡そ露國の政治社會は、右に挙げた三種の流派と外に一つ頑固守舊專權主義の所謂官僚派なる者と、都合四種族の集合に成ると云ふて宜ろしいが、眞の主戰論者は權門勢家の一團たる官僚派丈で、他は皆純粹なる非戰論者若しくは開戦後連綿たる大敗北を眼目として破壊的主戰論に變化したる者等であると謂つて宜ろしい。之を政府側より觀れば、徒に無名の師を起して天下の怨を買ひ、列國の親を失ひ、不可使知の方針を冒用して民の忠情義氣を殺ぎ、仁人君子の忿を招き、開戦の初に不覺を取りながら尙ほも卑劣なる泣言を繰返へして、内外の尊信を墜し、輕侮を致したるものと稱へて善からう。嗚呼日本の土小に民少而も新進の國柄を以てして善く今回の大勝を得たる所以のものは、惟り我に優勢なる勝因の存せしが爲めのみならず、彼露國に道般の重大なる敗因の在りしが爲めなりと思はるゝ。以親戚之所歸、攻親戚之所背、故君子不戰則已、戰則必勝とは孟子の一句である様に覺へて居るが實に千古不磨の明言、正しく當今の露國を指したるものかと疑はるゝ。

附言 世人或は我勝因の一として立憲政體の効果を擧げて居るが、私は之に熱

心なる賛同者でありながら大に議論の道行を異にして居る故、盛に意見を吐露して見たく思ふけれど、其の議論の半程に達する迄は、時に高尚なる政治學を用せなければ充分解説が出来ぬ部分もなきにしもあらずで、所論餘り繁に過ぐると思ふし、又結論は遂に斯の政體の國民的一致和協力行を促進する所以に歸することなるべければ、這般事理の大要は是迄色々述べ上げたる上下同意舉國一心以て王事に當り戦役に務めたりし事實に就ひて講究すれば直に納得せらるべきことと思ふし、旁々以て省略することとした。

第二章 社會上勝利の原因

第一節 我日本國社會組織の基礎は堅固である

凡そ國家の統一民情の健全ならんことを欲せば、宜しく其の國民的組織の成素齊整なる配合を得て、錯綜衝突することなきを要件とせなければならぬ。乃ち人種、言語文學、宗教歴史、風俗習慣、地利經濟等社會の存立及び活動の資料が、國內を通して各自齊一に成り、又相互調和して抵牾することなきを要件としなければならぬ。とだが、日本は斯の原則に顧みて如何と問へば、第一人種は純然たる大和民族であ

る。北海の寒邑僻郷に僅少なるアイヌ種族あり、臺灣の西半及び東半に數百萬の支那民種及び土蕃の蠻族ありとは云へ、彼等は皆共に極無勢力の集團なれば、敢て仰々しく日本國民は幾種の民族より成ると呼ぶにも及ぶまい。又事實上國民に然様の觀念なしとすれば、本問題の如き研究事項に對しては、單に一大和民族より成ると見做して斷案を下すも決して不可なる道理はない。次に言語問題もアイヌ語、臺灣語、土蕃語に就ひては、右と同筆法で觀察して善からう。若し其れ純粹の日本語使用上方言多くして、奥羽人と九州人と言葉が通じにくいと云ふた所で、其は則ち北日本の女は色が白、南日本の女は色が黒いとて、人種が違ふとは云はれぬと同じ事、一筋の日本語でさへあれば、設令北邊西陲遠隔數百里丸出しの田舎者が寄集まつて、四方山の雜談に少々意味の通じ難い所が在ると云ふ位では、大袈裟に國語が複雑で民心の統一を害すなど、謂ふべき義でない。斯様な事は説かいでもわかつて居る。説くのがはや不穩當と云ふ所だが、枯木も山の賑ひか一口加へて置く。又次に文學と云へば和學、漢學、洋學あり、又其等の中にも種々の流派あり、英佛獨其の他各國の學術ありて、學說も千種萬様、急激論あり、穩和論あり、折衷論あり、攻撃反駁交

々行はれて文壇の上紛々囂々の状態なりとは云へ、皇祖宗の遺訓日本魂の眞髓たる忠孝仁義の大道に歸着する譯なれば、論説の多種多様なる是恰も春光長閑にして燦然たる百花庭園を飾り嬋妍を競ふが如く、寧ろ進歩の動機たるべきも決して之が爲め國風を戕ひ、民俗を破るの事態ではない、其の又次に宗教觀は如何、神教あり、佛教あり、耶蘇教あり、各教中更に幾多の宗派ありではあるが、是亦文學と同一轍の利害關係に在るべく、殊に、大日本帝國憲法第二十八條日本臣民ハ安寧秩序ヲ妨ケス及臣民タルノ義務ニ背カサル限ニ於テ信教ノ自由ヲ有スあれば敢て茲に喋々云々するの要はない、第五に歴史は如何であるかと尋ねれば、日本全國を通じて唯一色と云ふても善い、萬世一系の皇室を中心とし、單純なる大和民族が時代を逐ひ世紀を重ねて、直線的に發展進化したる事實若しくは其の記録に外ならぬので、上仁に下忠なるの情義は、三千年の間連綿として替はる所なく、又斯の高潔美妙なる記事實錄に關する國民的確信を萬歳の後に蕩かすべき素質を有することなければ、是程結構なる歴史は世界萬邦比類なしと謂つべし、夫のアイヌの衰亡史や、臺灣の征服史は寧ろ日本國民の發展史として國史に雄裝偉觀を添ふべく、

固より其の純色を損傷すべき性質のものではない、更に進んで風俗習慣を視察すれば、一般に國民的服裝と稱すべきは長袖開襟用帶の所謂和服なるもので、上下推しなべての常食は米飯魚肉澤庵漬流義で、普通の家屋はと云へば木造紙障子疊敷方式と命名すべきものである、日常生活上主要の事物に於て既に然りであるから、他の習俗例へば冠婚葬祭の大禮より娛樂社交の小儀に至るまで、頭髮手足の用具より室内庭園の裝飾に至るまで、各地方皆其の趣を同じゆうして居る、或は服制に和裝あり洋裝あり、建家に木石造あり煉瓦造あり、食料に日本食あり西洋食あり、婚儀に三々九度式あり教會式あり、葬儀に神式あり佛式あり、頭髮を結ぶ者あり帽子を蒙る者あり下駄を用ふる者あり靴を穿つ者あるを見て、國民的風習甚雜駁なりと云ふ人あらんかなれど、其れ位は現時萬國交通の盛なる世に於て寧ろ當然の勢、惟に已むを得ざるの事態として許容するのみならず、中には正に大に獎勵すべきものもある次第なれば、固より之を以て純樸なる國風民俗を破るものなりと難することは出來ぬ、最後に地利經濟の關係も込み入つたる議論を試むる必要を見ない、我國土は蜿蜒として南北千里に亘り山岳河海の形勢犬牙錯綜の有様であるか

ら氣候風土水質の自然力より物産工藝商賈其の他百般の業務に至るまで著大なる差別あれど、是亦寧ろ國富人文の發達を促し進歩を示すものなれば専ら欣喜好樂すべきのみ、豈之を以て地方的利害の衝突を惹起し、民心の調和を紊るものなりと爲すべけんやである。

第二節 露國國民の人種、言語、文學、宗教、歴史、風俗、習慣、地利經濟

以上概略説明したる通、我日本の國民的組織の成素、社會的構造の資料にして齊整純潔なりとすれば、國家の基礎民情の發達の上に於て、堅固なる統一力、健全なる元形質あるべきは深く問ふまでもない事だ。然すれば日本國民が今回の大事變に臨んで、泰然不動一身同體、後援の事業に奮勵し、國運の隆昌を保持し、陸海の將士は君命維慎み、國難維憂ひ、日夜送兵行陣、軍令鎮營に徹して、凱歌戰場に揚がるの勢を呈したるも、固より當然の道理である。之に反して露國は前にも屢々述べたるが如く、民心離叛して國內騷擾、産業萎靡して財用擧がらず、將士軋轢して號令行はれず、風紀頹敗して軍陣紊亂と云ふ慘狀に没落したが、是元より社會構成の實質上既に幾

多の缺陷あり、民情各地方に於て相互融和せざることあり、遠近の州郡、新舊の都市、大小の邑里、各別利害の關係、思想の流行、智識の程度を異にし、一般周布的性質を有する制度法令の威力上に發達すべき國家的統一を得ざるに基固するのである。果して然らば露國の州郡市邑社會的情實は如何なる状態に在りしか、是則ち次に詳細講話したい所である。

(イ)人種 露西亞國民の如く數多の人種より成るものは、世界に類例が少い。先づ支那史上の元、歐羅巴史中の羅馬位が比較の相手にならうか、現時に於ては全世界の諸國民中に索むるも到底似寄つた者がない。歐露丈で云ふても、スラブ、フィン、ポーランド、ユダヤ、コサック、ターター、ジャーマン、ルーメニア、アルメニア等を其の著しき者とし、全帝國を擧げて云へば尙ほ幾十種に及ぶと云ふ。此の中スラブ民族は最も優勢なる者で、一億四千萬の總人口中の半數を占めて居るが、斯の民族も亦更に大露西亞、小露西亞及び白露西亞に分別せられ、大露西亞人は他の二つの合數に二倍し、歐露民口總數の三分一に達して居るので、他の民種は一として其の數之に及ばざるの次第であるから、優勢中の更に優勢なる者と成つて他の全民族を壓倒し、露西亞

全國民を代表して居る。其れで露西亞大帝國と大袈裟に言ひ觸して仰々しき看板を掛けては居るが、恰も廣き家屋敷に多人數住んで居るけれど、其の六七分迄は傭人食客厄介者で、眞の家族と云ふては僅だと云ふ様な調子、實に奇怪なる世帯ではないか。殊にコサツクは猛勇なる軍人として畏敬すべく、ユダヤ人は暗々の中實力を有する金穴として取締るべく、ポール人、フィン人は革命騒動の本場として警戒せなければならぬと云ふ状態だから、幾多人種の異同は、露國の政治上至重至難の問題であつて、其の國民統一策、民情融和策を妨ぐること一通でない。純粹なる一民族から成立して居ると云はるゝ我日本人などの、殆ど想像し得られぬ様な不可思議なる混雜紛紜が瀕々として起つて居る。

(ロ)言語 土地人種が違へば言語の異なるは自然の勢である。唯現今の各國家は競ふて教育殊に國民教育を奨勵して居るし、交通來往殊に住居移轉が盛に行はるゝし、依つて以て人種の混淆錯綜すると共に言語の同化和合を致す所以なれど、唯僅に數十百年の業を以て人種並に言語の相異を根本的に撲滅せしむることは出來ぬ。殊に露國と謂つては、封疆の廣大なる四方千里歐洲の半面に占居するの有様で、

氣候風土山川草木の光景より物産工藝其他社會百般の人事に至るまで各地方に従ふて差別あることなり。又教育殊に下級教育普及せず、出版檢閲の制度施行せられ、學問智識の發達を害し、國民中の大多數者は低度の讀書力さへなく、普通の用語すら解せざるの有様なるに加へて、移住轉居の制規嚴重にして一定の距離以外に出で若しくは一定の時日を経過する時は旅行券を必要とするので、大に交通移轉を妨ぐることなれば、地方及び人種の區別せらるゝが如く、言語も其れゝゝ區別差別せらるゝのは固より必然の結果である。其れだから各道各府縣各村制令透徹し難く、民意推量し難く、大帝國の劃一方策、百姓懷柔政略行はれぬのも氣の毒ながら已むを得ん次第だ。

(ハ)文學 露西亞は一國家としての形體確立せず、一國民としての素質完備せず、政治團體としての統轄困難なるの狀態に在りし故、強勢なる專制政體を建て、嚴酷なる法威を藉り、陰險なる警察に據り、傍では秦の始皇の筆法を學び、黔首を愚にするの政策を執りたれば、國民は痛く其の元氣の活動を抑へられ、智識の發達を妨げられ、遂に獨立自主の精神を喪失し、専ら政府依頼主義に陥落し、壓制干涉は甘んずる

の状況に没溺した。斯く成つては、時に悲憤感慨極まる諷刺的純文學の萌芽を見ることがあれど、未だ全國を動かすが如き旋曲折したる時事關係の名文大作は起ることが出來ず、唯却つて彼得大帝革新改進の盛運より産出されたる單純粗笨の大國家主義、スラブ團結論が、獨り熱心に歡迎せらるゝ位の有様であつたから、十八世紀西歐の思想界を震撼したる深遠なる學說、優美なる文藝をも採擇玩味するの才力なく、猫に小判と云はんか馬の耳に風と評しようか、徒に雲煙過眼視するに止まつた。然るに子供も一歳過ぎると、歩みだす物言ひだす、露國民として何時までも吳下の阿蒙でない。時世の推移氣運の開發は漸く露國々民長夜の惰眠を醒まし、十九世紀の半ば頃よりして、因循姑息の舊弊を去つて革進活動の潮流に乗することゝなり、英吉利の自治制度、獨乙の哲學思想、佛蘭西の政治學說は、圖書檢閲の難關をも胃して流入し、文化の啓沃風氣の發展を促進すると共に、復從來の沈痛悲哀なる文想思索及び政治經濟社會並に天然の陰鬱なる光景と相抱合して、現實主義理想主義の間の孑然たる人世觀念若しくは文學思想を涵養し、思念進逸現世の腐敗を痛憤するトルストイ、論鋒激越社會の改造を絶叫するゴルキヤを育成し、遂に從來客

分たる地位に在りて常に頭の上がらぬ幾多の民族は申すに及ばず、國家の中心となつて多くの恩典に與るべき大露西亞人までも政府反抗の態度に出づることゝなり、建國以降二百年全力を盡して築き上げたる大帝國の國民的觀念も、根底より動搖することゝなつた。斯くては民情の圓滿穩健なる養成は固く望み得られぬ譯合だ。

(ニ) 宗教 國政が宗教と盛衰消長を同ふすることは、古今の實例に於て多く見らるゝ所であるが、兩者關係の極親密であつたのは、重に古代に屬し、近代は既に餘程變つて來た。現今の趨勢では、固に遠からざる時期に於て全然無關係と成らうかの様に思はるゝ。其は畢竟するに社會の進化人文の發達に伴ふ自然の道理なりとは云へ、亦各國政府が信仰強制手段に於て失敗したること、政教の關係親密に過ぐるは政治上社會上反つて不利なる所以を認識したること、異宗教殊に耶蘇教の新舊二派が各相當の勢力を有し、孰か其の一に片寄る能はざること、別けても舊教は羅馬法皇を世界の大神首と仰ぎ各國君主の上に置かんとする故、之を採つて政教一致の方針に出づるは、直に國家思想主權觀念を傷くるものなることの四原因に歸す

るであらうが、獨り露國に於ては這般の事情存在せず、専ら露西亞教即ち耶蘇教の一派ではあるが、希臘教と稱して殆ど全く露西亞一國持切りの宗教が偉大なる勢力を有し、國民の大半殊にスラブ民族全體が之を尊信して居り、露西亞國皇帝は靈俗兩界の首長として内閣及び宗務院を統轄し、絶大なる威徳を有する者として國民殊に農民から恰も神の分身なるが如く崇敬せられて居るから、善く政教一致の舊式古典を維持し、中央集權制度の成長と相待つて、國權の強盛、國民の統一、民情の化育に多大の資益を與へたのである。其れで昨今に在りても、西歐諸國に屢々見ることが如き宗教上の大紛紜は決して起らぬことは受合だが、然るに彼を以て首尾善く政教の分離を成就し、兩者衝突の素因を根本的に掃除したる我日本國に比較する時は、尙ほ正に雲泥の差ありと云ふべし。何故かと問へば、甚大なる勢力なしとするも、耶蘇教の各派を始め猶太教、回教、佛教、其の他土地人種の相異に基因する幾多の宗派ありて、内治上相當の面倒を來すのみならず、國教其の物に就ひて大に憂ふべき事態が生じて居るからである。無敵國外患則國亡と云ふ諺もある通りで、露西亞國教は獨尊自得の地位を占め、西歐諸國の新舊兩派とは遠隔し、國內には有

力なる異教なく、國外には多數の信者なしと云ふ有機で、全く他の刺戟競争を受けざるが故、従ふて自から改良刷新するの機會を得ざつた。其れで經文儀禮は總べて舊弊に泥み、教義は嚴峻苛酷に過ぎ、僧侶は威信を缺き、信者は離叛を企て、廣大なる寺領地は民怨の資となり、逆境に居るの寺院は革命運動の魁となると云ふ悲況に墜落した。斯くなると政府が一に軍隊二に宗教と望を屬したる國教も、最早頼み少きものと謂はなければならぬ。

(ホ) 歴史 周之命維新とは少し奇麗過ぎる引例だが、先づ、然様な調子で、露西亞は千載の老國にして復二百年の新興國である。其れで餘り昔の事はさて置き、彼は大帝の中興以降、就中緊要な事實のみを講究すること、しようが、實は今日露西亞と呼ぶる、大物の形成は同帝に始まるので、其の前後を對照すると、眞に隔世の感ありであるから、同帝の時を以て建國の創源と稱するも敢て不當でない。二百歳の新國とは即ち是事を云ふのである。此の通り、新建の國家でありながら、彼が現今の強大を致したる所以は、決して尋常一樣の手段であるまいとは、何人も容易に考へ及ぶ所だらう。果せる哉、彼の露西亞内には、英主相續ひで立ち、外には攻城略地連り

に行はれたることであるが、英邁の君主は常に手易く出づるものでないから、獨り露國の多く之を得たる事實に關しては、何か特別の原因があるべき筈。又外國城地の攻略は、孫子曰凡興軍十萬、出征千里、百姓之費、公家之奉、日費千金、内外騷動、怠於道路、不得操事者七十萬家、に相違なければ、是亦右同斷であらうと思はるゝが、如何にも然様で、特別の大原因が存在して居る。又之が爲め、非常の結果も生じて居る。露西亞國殊に同帝室の歴史は、戰鬪の歴史、鮮血の歴史である。建國の英傑中興の明主と稱讚せらるべき彼得大帝が、既に業に最も不規則なる手段を以て王位に即き、慘澹たる流血の中に優勢なる地歩を占めたと云ふ調子だから、後世子孫の成行は聞かずとも推測せらるゝ譯だ。寔に僅十四世二百餘年の間、帝王の弑虐三回、尊位の篡奪亦三回、帝王非命の最期を遂げたる者、死因の充分明瞭ならざる者併せて二人と云ふ次第である。即ち豪傑たる人は好機の來る儘に弑虐篡奪を行ふて帝位に登り、天下の民も却つて庸君を去り明主を得たるを喜ぶの勢であつたから、實に不義不倫の事ではあるけれど、兎に角多くの賢君英主の登極を見たのだ。殊に死因不明、非命最期に屬する帝王は一代の俊傑稀世の英雄と稱せらるべき人であつて、連り

に外征を企て、民怨を招きたる結果遂に不幸の死を得た者である。其れ故露國の歴史を一口に云ふと、豪傑が非常の手段を以て帝王の位に即き、至難の外征を行ふて領土を擴張したるに外ならぬものだから、恰も一代一足飛に巨富を得た家は、大抵孰も尋常の主人及び家族があつて、尋常の生活及び業務を爲したるものではなく、外に向つては意地わるく無理を言ひ掛け、吝嗇で小利を争ひ、依つて以て忿怨を招き、隣里郷黨親戚故舊より攻撃せられ、孤立無援四面楚歌の聲と謂ふ様な悲況に陥り、内に在つては品行治まらず、蓄妾庶子あり、益々以て家庭を紊り、夫婦父子兄弟姉妹僕婢等の間苦情絶へず、殊に財産金穀の争起り、其の極遂に毆打殺傷さへも行はるゝに至り、表面の觀察では門構立派、家屋敷高大、庭園美麗、如何なる名族貴紳の邸宅かと疑はるれど、門内一步此の世からの地獄、百鬼萬怪横行するの修羅場と謂ふ有様と同一轍地廣く民衆、古の羅馬今の支那に似て而も其の強盛は、此等古今の二國は勿論他にも比類なしと謂はるべく、嚴然畏るべき大帝國の姿勢を示せども、其の内容に至つては、亂行非違困難苦痛が充満して居るのである。先づ斯の通の次第だから、如何に中央集權の制度が強盛で、專制政體の基礎が鞏固であると威張た

處が國民對政府の場合に於て、恰も個人間で、彼の人は腕力が強いから恐ろしいけれど、懐かしくない、素性が美はしからの故、尊ぶ氣がせぬと云ふと同じく、力餘り有つて、徳足らず、威餘り有つて、恩足らず、畏服するも信服せぬと云ふ調子だから仕方がない。

右述べたる所は露西亞帝國本部即ち主要部分殊に帝室の歴史であつたが、是から同帝國全體一般の歴史を説くこと、しよ。同國全般の歴史と謂へば、實は純然たる一直線の國民發展史でなくて、外國の領土侵略史である。幾多民族の滅亡史である。國家の發達史でなくて、國土の増加史である。例を以て云ふと、動植物の生長するが如き發育史でなくして、岩石土塊の形を増大するが如き添附併合の成行に類するものであるから、先づ一個の歴史にあらず、數個の歴史の集團なりと云ふべし。而も其の起源年代が淺いのが、添附の物質併合の材料が善く融和齊整せぬ。科學上の言葉を藉つて云ふと、器械的物理的附合に止まつて、未だ元素的化學的親和に進まぬ様なものだから、新屬領各民族の歴史は恰も不溶解性の物質が水中に塊形を成して殘留するが如く、露西亞本部の歴史と相對立して、社會の表に活動して居

る。フィンランド史、ポーランド史、小露西亞人史、アルメニア民族史などは其の最も著しきものだ。其れで此等の歴史は露西亞本部の歴史が熾として光を放つ間は、星辰の明月に對するが如く成つて居るが、若し前者の光が衰へると、暗夜の銀河の如く燦然と輝き始める。近頃スウキー、ボルグ、クロンスタット、ワルソー、キエフ、オデッサ、ユーカサスなどに叛亂騷擾の瀕々相次ぐのは、即ち戰敗の創痕深く武威衰へたるの缺陷に乗する各民族史的反動である。其處で這般の事實と前に述べたる所とを通じて觀れば、露西亞の歴史には高風閑雅優美なる點は少しもなく、唯悲愴慘憺たる血腥き帝位の篡奪史、政府の外征史、民族の叛亂史の合集史なりと云ふ有様である。から驚かざるを得ない。嗚呼斯の如くにして、尙ほ天下泰平海内安康を得べくんば、木に縁つて魚を求むるも手易き事であらう。さても、氣の毒な話だ。人の憂を樂むではないが、之に比べて見ると、我日本國の善いことが愈増にわかつて來る。私は明治三十七年春出征の際、或送別會の席上に於て、餘事はさて置き斯の一點丈でも勝敗の數が定まつて居る。戰役が長く繼續すると如何やと心配する人もある様だが、右の次第だから繼續すればする程勝利が大きく成つて來ると演説したことだが、

幸に豫言が適中した。適中したと謂ふた處で、易者が龜甲を焼き、筮竹を捫り、經典に據り、神力に禱るなどは、事違ひ、全く右に記した通りだ。總べて専ら現在目前の複雑なる事實のみを見て居ると、局に當る者は迷ふで、物の真相を得難い、宜しく過去に遡り、事物の根源を詮索し、一思ひ大擾みに判断を下すと、造作なく中るものだ。鹿を逐ふの獵師は山を見ずと、露西亞を知らんとならば、彼の現状よりは寧ろ其の歴史を研究すべしだ。

(ハ) 風俗習慣 (ロ) 言語の段に説述したるが如く、露國は領土廣大、人種數多、教育不進、交通制限の爲め、言語の各地方各民族に於て相違すると共に、風俗習慣にも差別を生じ、國家の統一、民情の融和に甚大の障害を來したることは、固より當然の勢であつて敢て説明するの必要もなからうが、特に氣候の勢力並に(ニ)宗教の段に辯明したる舊式の儀典、嚴酷なる教義の効果が、一般普通の國風民俗に如何なる影響を與へたかの一點は、此處に是非共話して置かねばならぬ事だ。露西亞の北西南三方は海あれど水面甚狭小なるし、東方は全く廣大なる陸地だし、氣候は勢大陸的である。殊に高緯度に位置して北氷洋の寒風に吹き付けらるのだから、寒威は頗る酷烈に

して、冬季は殆ど一歳の半ばを占むると云ふ有様である。其れ故露西亞の人民は、冬季半歳の間は、窓戸を密閉して、數多の家族集合して暖爐を擁するのだが、之が爲め室内は不潔にして健康を害し、家庭は紊亂して不義を誘ひ、業務は廢頓して貧困を來す。加之食物殊に肉類乏しくして體温を保ち難く、從ふて強烈なる酒類を飲用し、且つ祭祀紀念其の他の儀式に屬する休日多く、從ふて連日酒宴に沈溺するが爲め、前記の諸弊害は益々其の勢其の度を加ふることゝなつて居る。又已むを得ずして、偶々戶外に出づる時は、厚着重着を用ふるが爲め、運動活潑ならず、作業敏捷ならず、宗教上の儀禮は舊弊を墨守し、教義は過酷に強制せらるゝが爲め、因循遲鈍の氣風を馴致して居る。斯の如くにして寒威の酷烈、宗教の典式は衣食住の進歩を妨げ、身體精神の發達を挫き、施ひて性行の改新、道德の化醇を阻礙することゝなり、遂に忠愛、仁慈、着實、勤儉等の美風を壊滅に歸せしめた。寔に其れ斯の如くに墮落したる國民を驅つて戦争を始めたる露國政府は、所謂以不教之民臨戰、是則棄民也の咎を免れざるものか、其の大敗北を招きたる所以のもの、豈偶然ならんやである。

(ト) 地利經濟 露西亞本國は南北森林區平原區に二大別せられ、平原區は更に高地

低地沃地瘠地に小別せらるゝが、其の大小區域の天然的勢力は著しく相異して人口の粗密、生活の状態、經濟的利害等に影響を及ぼし、或は法制行政上の統一を妨げんとすること少々でない。是恰も支那に於て南清北清の別あり、遼河、黄河、揚子江、珠江の各流域に獨立分離の勢あるが如く、全國が二三若しくは四五の大々的區域に分れて人事の相違、利害の衝突を現出して居るから、其の相違の大なること衝突の激しいことは、到底日本や西歐諸國やの各行政區劃内、極々狹隘なる範圍に起る場合とは比較が出来ない。其れでは是迄中央集權の強盛なる間は何事もなくして濟んで来たが、將來は如何に成り行くか測られず、或は此等の事情に淵源して、數個の獨立國に分離するかも計り難い。次に士農工商經濟上の關係如何と問へば、露國には貴族僧侶其の他徒手遊食の輩多くあり、且つ此等は廣大なる土地財産を有しながら、或は免税の特典に浴することある調子で、租税は重に直接又は間接に他の三民に歸着若しくは轉嫁せらるゝ故、負擔の輕重宜しきを得ず、貧富の懸隔益々甚しきを加へ、社會組織の勢力を薄弱ならしめて居る。加之工業は今尙ほ都市工場方式に進まずして多くは農民の副業に屬するの有様だから、經濟の發達は望み得ず、又從

ふて商業の隆盛を期するに由なく、商人の數は農民數の十一に止まる有様だから、國富の増進は阻害せられ、遂に納税の責任は主として農民に歸することゝなるので、之が爲め其の貧窮困厄は言語に盡されぬ状態に陥り、遂に着實の氣風柔順の習性を傷つけ、忠義の至情、服従の精神を戕ふに至つた。抑も國家の大本國民の中堅たるべき農民殊に露國政府が金の泉んで來る池、幾何程でも押付けれる護謨玉と思つて居つた農民が斯く成り果てゝは、露國並に其の政府に取つて寔に由々敷大事と謂はなければならぬ。

第三節 中等民族

本章を卒はるに臨み特に一節を立て讀者諸君の深き注意を仰かねばならぬのは、社會組織の基礎たるべき中等民族問題だ。凡そ上流の者は資産あり智識あれども身體羸弱にして強健の氣象を缺き、下流の者は健康にして勤勉なれども才學乏しく恒産なしと云ふの缺陷がある。今此の間に處して、相當の家産を有し、勤儉の美風を持ち、學識才智兼備つて、體力の旺盛なる者、即ち國家の中堅國民の精銳と謂はるべき者は、獨り中等社會に索めなければならぬ。是に於て諸君の聽かんと欲する所

は我日本に斯種の社會階級あるか否と云ふ點であらうが私は幸に即答が出来る。我國には最も純粹なる理想通の中等民族が存在して居る、其の内容を云へば士族の全部、農民の大部分、商工人の一部より成り、其の總數を云へば五千萬國民中の過半を占めて居る。今回の戦役に於ても重に斯の中流人士が陸海の勇將猛卒となつて活動した。之に反して露國には此の重要な中流社會或は中等民族と謂はるゝ者が缺乏して、一方には貴族地主大商人、他方には僕隸勞働者小町人と云ふ有様だから、上下貧富貴賤の懸隔甚しく、若し一步を誤まらば兩階級の間に激烈なる軋轢争闘起り、施ひて國家の動亂を導くに至るの恐ありた。否、既に已に數十年前より其の狀勢を成し漸次増進しつゝあるのである。然し尙ほ以上の説明に加へて特に言つて置かねばならぬ事が一つある。其れは何かと尋ねれば、露國に於ては上流社會即ち幾多の缺點あるにもせよ、帝室の藩屏、政府の味方としては人後に落つべからざる貴族の大半が、或は頑迷、或は腐敗、或は破壞主義に陥つて居ると云ふ調子だから、彼の國社會の基礎は益々薄弱で恰も火山の如しだ、噴火震動否禍亂争奪の瀬々として起り來るも洵に已むを得ぬ次第だ。危哉々々。

附言一 世人或は戦勝の一原因として特に我農民の功德を説くことあるが、如何にも其の通り本文に述べたるが如く、我農民は國民中最も頼母敷中等社會の大部分を組織して居るし、又多くは下級の軍人として作戦行動の最も直接的なる戦闘働作に與る者なるし、其の心力體力の戦勝に大關係を有することは敢て説くまでもない事だが、今回の戦勝は純然たる商業國、而も他の事情に於て我と同様なる國に對して得たるものにあらずして、我よりは尙一層單純なる農業國、而も農民の數は全國民中の大半を占むると云ふ國を相手としたるものであるから、特に我農民の功德のみを擧ぐるは穩當でない。若し世人の意見にして、我農民は彼の農民に優つて居るが、我商工民、其の他の社會は彼の商工民、其の他の社會に劣つて居ると云ふにありとすれば、其の意見に幾分の意味が生じて來るけれど、其れでは事實に違ふべし、故に世人の意見も同より然様ではあるまい。して見ると我農民が彼の農民に優つて居ると云ふと共に、我商工民も亦彼の商工民に優つて居り、我上流及び下流の社會も亦彼の上流及び下流社會に優つて居ると云ひ、遂に進んで我國民は彼の國民に優つて居ると云ふこととなり、世人の説

は恰も日本軍は強いから勝つと云ふて、何故強いか又如何様に強いかを説かざるが如きもので、寔に價值なく意味なきものとなる。何故かと云へば國民が優つて居るから戦に勝つと云へば最早其れで議論は終結だ、事理を論ずるの必要は少しもない、畢竟するに國民の優つて居ることは云はいでも明瞭だが、唯其の如何なる原因に於て、又如何なる諸點に於て優つて居るか、又然く優つて居るが爲め如何なる働作に出で、如何なる勝利の原因を作成したかと云ふとを辯説しなければならぬのである。果して然らば世人にして斯の道理を心得ながら、尙ほも右の農民功德説を提起すると言は、是則ち問題を以て問題を説かんとする所謂循環論法の誤謬に陥つて居ること、思ふ。且つ私は既に本文の中等民族問題論の處に於て、我に之有つて彼に之無く、其の有無は直に彼我國民の優劣を示すものなること及び我農民の大部分は貴重なる中等社會を組織して居ることを述べ置きたれば、私の彼我國民優劣論並に我農民功德論の要點は諸君の善く了得せられたること、信じ世人の非論理的意見を採らぬこととした。

附言二 世人或は國民の後援は戦勝の大原因である、然るに貴下の之に就ひて

一言の詞なきは如何と難することあるも計られんが、戦勝の一原因否寧ろ大原因として、國民の後援が存在することは固より云ふまでもない道理だ。唯然機謂つた丈では餘り漠然たる見立に止まる譯だから、前に「第一政治上勝利の原因論に於て、上下和協國民一致の美事に行はれたること及び其の和協一致の一實現として國民の後援が出でたことを言ひ置きたるし、又其の後援なるもの、更に實現したる所謂後援事業の斷片零碎は所々に説述せらるゝであらうから、特に題目を設けて這般の原因論を爲すことはと差控へる。

附言三 世の達識者或は戦勝の大原因として新聞雜誌の効驗を説くことあらんと思はるゝが、畢竟するに此の二者は社會の耳目と謂はるゝ調子で、恰も人體の生理に於て、耳に聴き目に視るから腦に感じ、又腦に感ずる所あるから耳を聳て目を向くるが如く、新聞雜誌の言論は國民一致の表彰であり、又之を促進するの勢力機關である。其處で前段の場合に於ては國民一致の公布方法となり、交戦國並に外列強に對する上大効驗を呈したるべく、後段の場合に於ては當局者の利用の宜しきを得たること及び記事論說に與る各文士の功勞に歸すべきこと

で、是亦前に第一政治上勝利の原因論の段殊に露國爲政家の執りたる不可使民知主義の弊害論の處に於て詳述したる趣旨より推考せらるべきこと、思ふし、又事理は別に込入つたるものでないから、單に諸君の注意を喚起して置けば、其れで充分なること、思ふし、勞々以て長談の新聞雜誌功德論は省略すること、した。

第三章 歴史、道德及び教育上勝利の原因

第一節 我國體と國民的思想と史的觀念

我國は開關以降三千載、上に萬世一系天壤無窮の皇室を載き、下に忠勇義烈の精神潑々活躍せる國民を保つての國柄であつて、頗る鞏固なる基礎の上に成立つて居ることは、前既に「第二社會上勝利の原因論」中の我歴史解説の段に概略詳明したる通りなれば、復更に此處に長々と繰返へすの必要はないが、唯其れ斯の歴史有り、斯の史的觀念の最も旺盛に活動して居るが爲め、忠君愛國と謂ふ高尚なる道義精神も出來、不義不庭の賊徒、暴横貪婪なる惡國の跋扈を絶對的に許容せぬと謂ふ實例も現れて來る。其處で前に「第一政治上勝利の原因論」の處に説述したる通り、尙武國の

本領嚴然として立ち、其の精華たる武士道なるもの發生し、未曾有外海の盛名も保持せられてあるのである。言葉を換へて言へば、我國は如何なる國難を冒しても斯の國を固守せなければならぬ、同時に又斯の目的以外純然たる利益問題や、忌々しき虛榮野心の爲め無名の軍は起さぬ、若し不幸にも出師の事あらば、其は則ち大々的義戰でなければならぬと謂ふ論理である。是に於てか國是定まり、民心固まり、道德の基礎堅牢にして教育の方針明確なることを得、一朝有事の日は一般國民は南船北馬身體財産を犠牲とし、陸海の將士は義を泰山の重きに置き、命を鴻毛の輕きに比し、勇戰奮闘するの大精神が湧起つて來るのである。

以上の所論は一般に國民の教育程度の高低深淺を問はず、共に等しく抱持する所の觀念精神及び此等の産出物なる忠勇義烈の行動に就ての話であるが、尙ほ茲に一は深く且つ高き教育を受けたる者、他は淺く且つ低き教育に止まる者の頭腦を養ひ言行を導く大小の事理に關して、特別に話して置かねばならぬ次第がある。其は右にも述べたる如く、天日嗣の御位は嚴然不動の淵源竝に萬世不易の命運を有し、國家と終始存亡を同ふするものであつて、純粹なる一個の大和民族が其の血

流を引ひて發達し、所謂家族的社會集團を結成したと云ふ確信に基ひて、皇室と國民との間には、權力服従の法律關係以外に、親子の情義即ち仁慈愛撫孝悌恭順など謂ふ道德關係が存在するのだから、忠君と愛國とは一致同體であるとの優美なる思想が國體の支柱と成つて居る。高等の教育ある者にして既に斯の確信と思想とを堅固に又豊富に抱持するのであるから、他の一般國民中或は斯の道理を明瞭に自覺することが出來ぬ者に在りても、法威力や義務心の強制束縛を待たずして、不知不識の間斯道の指示するが如く圓滑に動作することを得るのである。次に教育程度の低き者の思想感情を涵養する資料に就ひて話すると趣味津津たるの感がある。學者或は曰はく我國の歴史は概して戰鬪の記録である。善く評すれば不全なる戰史で、悪しく評すれば立派なる軍談である。彼の西洋史籍の國民の發展社會の文運を説くものと比較する時は洵に價値の少きを歎せざるを得ずと。成程其の批評も一應の道理がないではないが、然し我戰爭の記事的史體の國民尙忠尙武精神を獎勵したる効蹟は決して没却することが出來ない。又降つて稗史、小説、繪畫、彫刻、演劇、淨瑠璃、講談の類が、時に必しも善美なる効果のみを生じたとは云へない。

にしても、亦之に由つて忠義任侠の習性情意並に功名心を鼓吹したることも決して少しと爲すを得ずだ。其の證據には小學兒童が教科書記載中の或英傑を抽出して、例へば和氣清磨になりたいとか、源義經になりたいとか、幼穉ながらも頼母敷理想を描き、又新聞の雜報位も讀み得ぬ擔夫走卒が大石義雄を欽慕し、宮本武藏を氣取り、無邪氣にも皇國の美風に私淑して居ると云ふのは是全く前顧の歴史乃至講談の力である。然れば西洋人が日本には基督教もないのに、國民の道德をどうして養成するだらうかと訝つて居る様子であるけれど、吾々から之を聞くと寧ろ憫笑に堪へぬ思ひがする。従ふて又古支那の聖賢が天命性道教と事面倒に説立て、軌近の學者が道德の基礎は人類の共同生存要件たる所以に在りとか、眞善美は神意の發現並に其の宗傳であるとか、小理屈を列べ立て、居るが、私は右に述べたる通の次第だから、我國民道德の根底を天命論や、社會論や、宗教論やの上に置かずとも固より差支へなきこと、思ふ。是に於て私は口頭を清め、筆硯を洗ひ、衣襟を正して断言する、我國民道德の根基は斯の高尙優美なる國史の上に存し、皇祖宗の威靈に因ると謂ふ優雅而剛健なる信念も亦之より生じ、至尊の御聖徳は斯の歴史を貫

流する哲理の現化竝に又斯の威靈の福音を傳承する正統にして、天下億兆道義徳行の模範竝に又義勇奉公の動機である。古漢土の聖賢が、君は民の師父なりと苦慮齟齬したる理想も、我國に於ては自然の間容與簡易にして條達疏通し、又彼等が徳配天と謂ひて君威の淵源を擬定したる物體も、我に於ては然く空遠茫漠たる假想境に在らずして、最も明晰なる史的事實の上に存すと謂ふ結構な有様である。

第二節 和魂漢才、士魂洋才

泰西の識者中、今回我大捷利の有力なる原因として、古來の道德心と近世の科學教育とが圓滿なる融合を爲し、偉大なる勢力を作成したる所以を説ひて居る者あるが、是は實に正鵠を得たる見解と謂はなければならぬ。然れど之も吾々より見れば、格別に奇抜な議論だとも思はれぬ。何故かと云へば、從來我國には和魂漢才とか、士魂洋才とか唱へて本末輕重の理を辯へ、精神と技術とを別々に養成する方法あり、又其の事實も有るからである。即ち近頃に至るまでは和魂漢才で主として形而上の發達を成して居つた所、維新此の方盛に泰西の科學を輸入して形而下の發達をも爲すこととなり、和漢洋三界の道德、學術、技藝を兼有すると共に無形有形の兩

方面、精神物質の兩要素を完備することとなり、偉大なる國民的勢力を造出した。換言すれば所謂世界萬邦の長を採つて我短を補ふたのである。斯く云へばとて既に已に我國竝に人民が、完全無缺理想通化成したのではない、今尙は最中其の域に向上しつゝある所で、萬事萬物に就ひて各國民を挺ひて居ると云ふことは出來ないが、先づ差當り軍事と道德との二つに於ては、慥に世界列邦に優越して居ると謂つて善からう。其れで我國民殊に軍人は堅固なる道德心殊に愛國心を以て科學的智識殊に銳利なる兵器を動かしたと云ふ譯だから、其活動力の雄偉濼々たりしことは想像するに餘りありだ。是に於て私は一言して置かなければならぬ事柄がある。其は何かと云へば、多數の歐米人は固より我國人中の或者までも異口同音に、戰勝の原因として教育殊に智識教育若しくは科學教育の効果を仰々しく吹聴して居るが、敢て誤りとは言はぬけれど善く前記の道理を辨へて後の事にして貰いたい。申すまでもなく精神なきの技術は猿の八真似である。漢洋の文物を輸入したりとて我に健全なる精神なくば、恰も胃病持が多量の滋養物を食込んだ様なもの、反つて害を爲すまで、益を爲すことがない。科學と謂ふ西洋の善い樹が日本國民と謂

ふ肥沃の土地に植へられたから爛熳たる美花を開ひたと譬言しても善からう。兎に角國民的資質が斯く成つて居るから軍隊教育も暫時にして仕上がる。軍人精神でも軍學兵術でも容易に了得せしむることが出来る。現に是迄學校教育が主として智育に傾ひて居つたけれど甚しき弊害を見ず、戦時の軍隊教育が驚くべき短期間で成熟したと謂ふのも畢竟前顯の理由が存在して居るからである。

第三節 家庭的及び社會的教育

此の邊に一つ意見を挿んで置きたき事柄がある。其は世人が今回の戦勝に關して、専ら學校教育を重視して家庭教育社會教育を輕視して居る所以に就ひてあるが、私の考ふる所に依ると、此等三者は今回の戦争に對して互に相讓らざる効驗を示して居る。何故かと言へば、多數軍人の享有せる普通教育は小學程度に止まり、爾來徵兵應募の日までは五六年乃至十年を經過するので、其の効果も漸次減退すべき筈だ。然るに入隊の際小學教育修業の有無に由り、軍事教育上著しき差異を來すと謂ふのは、遂に家庭及び社會的教育が其の效果の減退を防ひて居るからである。今這般の道理を一層具象的に説明するならば、日本國民の家庭には祖先傳來の刀

劍あり、鎧武者の繪畫あり、節句に鯉幟を樹つるの雄々敷祝儀あり、幼童の遊戲にも古英雄の戦術を擬裝したる軍事あり、家名を汚す勿れ祖宗を辱しむる勿れと云ふ嚴訓あり、侍の子と謂ふ者は飯を食べいでもひもじゆうないと謂ふ我慢あり、そなたも武士の娘じやないかと謂ふ戒言あり、天晴武者振勇ましし功名手柄を見る様など、出陣の門出を祝ふ老婆あり、祖先の威靈に頼り云々と崇高なる觀念を育成することあれば、支那の兒童が俎豆を陳ねて禮を習ひ、優雅なる徳性を涵養する精神教育及びスバルタ人の母が、汝楯を負ふて凱旋せよ、然らずんば楯に載せられて歸れ、の言葉諸共、其の子を戰場に送出したる猛々しき武士教育は我國民の最得意とする所である。又我一般社會には菅公楠公東照公を始め高德純忠智勇兼備の士を奉祀せる神社が各府縣郡邑に多くありて、心靈の修養に資益する所あり、舞劍柔術、劍舞競馬、要馬、打毬、相撲、番持、旗奪等の武道力業娛樂あり、詩歌、俳句、討論、演說、學藝會、音樂會、展覽會、パノラマ館、博物館、圖書館、新聞雜誌、縱覽所、共進會、模範工場、物品陳列所等の新智識新思想養成の事業及び機關あれば、支那人の孔子廟、關帝廟を祭るの思想、希臘人の徒步騎馬乘車の武技競争、音樂詩歌彈誦吟咏の文藝競争は我國俗に

最も普通なる所である。約言すれば我國人は家庭に於て襁褓の頃よりして尙武の氣象を養成するの仕組に成つて居るから、長じて社會に出づるの日は益々之を發達せしむると共に、傍學校の科學教育を受けて長く其の効驗を保持することゝなるのである。斯様な次第であるから、私は家庭及び社會の教育を一般の場合殊に軍事關係に於て、世人よりは遙に重く値打する者であるが、然ればとて英國が學校の工業教育を輕んじたるが爲め獨逸に一着を輸するに至れるの事實を知らざる者でなければ、社會萬般の事物に關し、又特に戰闘働作に關して學校教育の効驗少きことを言はんと欲するのではない。唯英國の工業教育の大部分が家庭的及び社會的方式の下に於て自然の間に善く行はれて居ると同筆法で、我武士的教育新智識養成が學校以外に於ても盛に行はれて居ることを、諸君に納得せしめんが爲め長話をしたのである。我國新智識養成の一點は、英米獨佛等の文明諸國に比較して今日猶ほ遜色なきにあらずではあるが、露國に對照して優ること萬々であるから、戰勝の一原因として見るも少しの不都合はない。

第四節 露國の歴史、道德、教育

日本は以上縷々陳説したる通り、古色蒼然たる歴史を有して、其の史的哲理の發動する所堅固なる國民道德を産出し、教育の基礎たらしめて、漢洋の文學科學を其の上に移植し、爛熳たる美華味佳なる良實を收むることゝ成つたのは右に詳述したる通りであるが、之を以て歐米の第一流國に比照するに、軍事道德の二點は兎も角、其の他の各事各物未だ悉く優越したりと斷定し兼ねる次第なれど、特に今回の戰爭相手たりし露國に對照する時は一も遜色なしと云ふべし。其處で先づ本節の三問題の一たる歴史的觀察點よりして彼の國を調べて見よう。露西亞の歴史は、前既に第二社會上勝利の原因論の同國歴史談中に可成細説したることなれば、今更茲に其の全部を語るの要はないが、唯最も注意すべき點は彼の建國の歴史が血の歴史であつて、後世子孫に爭亂の種を遺し、天下百姓の尊信を害するの狀態に在るのであるから、明君賢相の英智辣腕を以て國勢を増進せしめ得たけれど、恰も人にすれば子供の時、樹幹にすれば若木の中に附けた疵が何時迄も癒へず、反つて自身の成長すると共に倍加するが如き有様であるから、彼の國難は輓近に降るに従ひ漸次増大倍蓰することゝ成つた。斯様な調子で、彼の國の歴史が唯に道德の發達に

資するの力なき所以は敢て説くまでもない義であるのみならず寧ろ反對に悪事の手本と成る位だ。古支那に於ける堯舜の禪讓は當時天下の美談として持囃され、其れが爲め愈増に聖人の名を高めたことであるが、猶ほ以て湯武の暴君匹夫論を産出し、後世禍亂争奪の本源たりし罪責を非認することは出来ない。况や露國に於ては建國の始めよりして、尊位僭窃帝王弑虐の悪例を遺したる者幾人も有るに於てをやと云ふ所である。其れで忠義の大道先づ壞れて孝悌の大義次ひで亡ぶ、其餘の事固より推知すべしと切言するの勢ひに在るのである。果せる哉、第二社會上勝利の原因論の各段に擧げたる通り、文學、宗教、風俗習慣等一として國民道德を維持するの資料となる能はず、殊に文學の趨勢風習の一端は反つて忠君愛國の至情を傷け、道德心の搖籃たる家庭を紊すの傾向に在れば、國民の品性を陶冶し、處世活學を修得せしむることは到底望み難い次第である。聞説北米合衆國の或軍醫は、廣島の一停車場に於て負傷軍人の歸還に際し、之を迎へたる近親隣朋並に一般人民の凜乎たる態度を觀、大に驚歎して其の近親中には妻子父兄姉妹の遙々遠方より、胸間無限の感想を抱ひて來れる者あらんに、兩者の相遇ふや嚴格なる辭禮の儀式

的に交換さるゝのみである。若し此の場合に於て女々しき情緒の勃發を制せなかつたならば、必や傍人の嘲笑を買ふのである。其の場處を更めて家庭的恩愛の迷逸する真相は固より窺ひ得ざることであるが、這般の光景は髓に善く日本特有の武士的風習を描寫するものであると謂つて居る。其處で之を以て、彼の露國軍人の出征に臨むや愛妻が其の戎衣に絶り、歎歎嗚咽悃々喟々一日も早く生還せんことを懇訴す、是即ち彼の民俗、社會の習なりと謂ふ愚痴劣情の行はるゝに比較する時は、彼我家庭教育及び社會教育の效果に著大の差別あること敢て説くを要せずである。既に彼の國家庭及び社會が斯の如く頼み少いとなれば、此の上は唯一つ學校教育の力に據らなければならぬ場合であるが、さて復其の學校教育が尙ほ一層覺束ないと來ては、泣こうも涙がないと歎息する所だ。即ち初等教育は頗る振はず、國民の大半は低度の讀書力さへなく、善事は固より悪事さへも爲し得ず、唯蠢蠢たる蠻愚に甘んずるの状態に落ち、高等教育は割合に盛であるが、其の學生は空想に流れ兇險に馳せ、其の授くる所の文學科學は國運の發展を導くの利器たらずして反つて朝憲紊亂、社會破滅及び毒藥爆裂彈製造の好智と成ると謂ふ痛ましき有様又中

等教育は無能を造るの外、其の程度の高低に従ふて、前二者に類するの悲況に在るのだから、實に氣の氣な國情ではないか。

以上述べ立てたる所は彼の國歴史竝に教育と道德竝に國情との一般關係論であつたが、尙ほ此の處に於て其の特別論を爲すの必要がある。我日本は前に史上の事實竝に國民の覺悟として斷言したる通り古來未だ曾て外國の侮を受けず、將來亦正しく然らざるを得ずと謂ふことであつて、現に神功皇后の新羅征服、北條時宗の元寇擊破、豊臣秀吉の對明韓役、明治七年の臺灣討伐、明治二十七八年の清國戰爭等一として外敵を膺懲し、國威を發揚せざるものはない。其れで我國民の頭腦には容易に軍は起さぬが、一朝驟然として奮ふ時は決して負けることはない。又如何なる故隙に遭遇するとも負けられぬと云ふ活歴史、活教訓があるが、露國に於ては然様でない。近く二百年以來の事にしても瑞典に破られ、土耳其に破られ、英佛聯合軍に破られたる等敗北の歴史が深く國民の心裡に沁込んで頗る戰爭を恐れることゝ成つて居る。然れば彼の國史は決して國民教育の資料とすることが出来ない。若し其れ之を以て敵愾心の鼓舞振作に利用すると言はんかなれど、瑞典や、土耳其や、

英佛やに對しては兎も角、我日本に對しては何等の効能も發揮する能はずだ。して見ると凡そ愛國心の發育に絶好絶大の勢力となるべき歴史教科が彼の國に於ては缺乏して居るから、學校教育も愈増に頼み難いものと成つて来る。(三國干涉、遼東還附の一件は我國民の頭腦に痛く刺まれたる事實にして、今回の戰爭竝に士氣奮興の一大原因と成つたことだが、之を説き始めると込入つたる政治論に亘る様になるし、又事實の真相は誰も善く了知する所なれば敢て論及せざることゝしたが、之も我國に於てこそ勝利の一因たれ、彼に在りては寧ろ日本に強固なる決心と抑ゆべからざる銳氣とを興へたるものとして、沈痛激烈なる恐日病を發作せしめたる次第であるから、國民の教育材料たることなどは程遠いものであらう。其れ之を以て、古往今來世界の東西に二つとなき道德國尙武國に向ひ、大膽にも又無謀にも萬事劣勢なる戰を開きたることこそ、露西亞國命運の盡くる所以なるか、天佑一度も降らずして神罰連りに到つたのは、露西亞に關する本節の三問題は頗る重要な事項であるから極々詳論細説したい思はあるが、這般の論説は愈々進んで愈々佳境に入るの有様で、如何程詳細に亘つたことで、盡くし難き理由も存在することなり。

又大概必要な事實問題は、前の「第一政治上勝利の原因」及び「第二社會上勝利の原因」の部分に掲げたることなれば、此處には先づ抽象的觀察論の主要を裝置するのみで、具象的觀察論は省略することとした。

第四章 天時地利上勝利の原因

第一節 人心和すれば天心應ず

私が此處に天時と謂ふ表題を置いた處で、舊式の頭腦を持つ者が陰陽説を爲すのとは事違ひ、矢張古今兵法の大家が示教して居る通り人和すれば天運有り、と謂ふ筆法で、人間が天の時を利用することを意味するものである。今回の戦争に於て、好運の循環は唯に再三再四に止まらざつたことであるが、後半期の海陸二大戦に於ける好運は亦格別のものであつた。先づ其の奉天會戦に就いて云ふと、戦鬪の激烈なる時機に當り、砂風激しく起つて敵に吹付け、我は之に乗じて進軍追撃するを得たること、河川の堅氷暖氣に遭ふて、今敵日を経過せば、既に人馬の歩みに耐へざらんとする危機一髪と謂ふ間際に奉天の陥落したること、曉霞深くして敵に近接するの便ありしこと及び露軍に取りては之が爲め日本軍の位置を見誤りて、退却の

際狼狽混亂したること、又日本海の水戦に就いて云ふと、第一日は西南風連りに吹荒れて敵を戦術上最も忌むべき風下の地位に置きたること、濃霧濛々として灰色なる我艦船を掩ひ、戦術上最も喜ぶべき形勢を作したること及び第二日は濃氣霧れて四分五裂せる敵の敗殘艦隊を展望するに便なりしこと等の事情は、實に稀有の天運であつた。然れど此等の天運は畢竟我軍の作戦行動が豫定の如く進行して彼我利害の地位を思ひ通りに造出したこと及び我は軍令透徹、軍紀確立、士氣旺盛であるから、敵の災厄とする所も、我軍に取つては反つて便利と爲したることに基くのである。換言すれば、人力の有らん限りを盡して天の時即ち天候地文の變化を利用したるもので、先づ人心和すれば天心之に應ずと云ふ道理だ。是に於て私は尙ほ一つ天時若しくは天運の戦勝に有力なる關係を及ぼしたる所以の事實を掲ぐることにするが、其は即ち二個年續きて米穀の豊作なりし一件である。抑も我國は昔より瑞穂の國と稱する次第で、今猶ほ農業國本の經濟組織に在るのであるから、米穀の豊凶は直に一般經濟社會の盛衰消長に關鍵し、施ひて國家財政の上に重大なる影響を與へ、更に進んでは風教の興廢、民心の伸縮にまで痛切の感應を及ぼす

ものなることは誰も善く知る所であるから敢て細々しく説明するの要はないが、唯此の處に於て特に云ふべきは、露國は戰時内憂外患瀕りに到るの慘狀に加へて凶歉亦痛激なるの悲況に陥りしにも拘らず、我日本が明治三十六、七兩年度共古來稀なる米穀の豊作を得たことである。我國は之が爲め平年よりは數億萬圓の國富を増進し、右に述べたる通り民情を和げ徳化を盛にし、上下公私軍國時代の理財經營をして其の道を得せしめ、義勇の精神益々活躍、兵士の出陣益々壯烈、軍需の供給益々豊富、海外の信用益々昂騰するの隆運を致したからであるが、其の豊作たる固より五風十雨天佑の之が原因を爲したるに相違ないけれども、畢竟するに亦前の疾風、堅氷、曉霞、濛氣、晴天など、同じく、至大至仁の天心が彼の出征軍人の艱苦に顧みて耕作に勉勵したる全國民の精忠義氣に感應したる所以に外ならぬこと、思はるゝのである。孟子の所謂天時不如地利、地利不如人和は萬代の至言、古人我を欺かずと謂ふべしだ。

第二節 兵勢得地而伸、失地而屈

次に地利は幕末の軍學家澹齋長沼氏廣敬著兵要錄に、夫地形者兵之助也、兵勢得地

而伸、失地而屈、兵勢已屈則爲敵所制矣と謂へるが如きもので、人和に較ぶれば大に劣る所あれども、猶ほ随分偉大なる効驗を有して居るから聊か詳しく説くこと、しよう。尤も單に我國内地利の一般論は、既に前第二社會上勝利の原因中の(ト)地利經濟の一端に述べたる次第であるから、此處には唯今回の戦争に對する特別論殊に滿韓地方との連絡に就ての地理有利論のみを試むることとする。我國土は長形の列島より形成せられて居る故、陸兵の集中には頗る時日を要するのであるが、艦隊の集中に關しては英獨などに比肩し難いにもせよ、佛露などに較ぶる時は幾層倍便利なる地位に在るかも知れぬ。又陸戰に於ても東洋の海面に行はるゝ對歐羅巴諸國の場合には、彼我作戰行動の上、勞逸難易の差月、籠雲泥も管ならずと謂ふ所である。其れで今回の對露戦争に就ひても、彼は陸上西比利亞鐵道に由りて五千哩、海上地中海を経て一萬五千哩、喜望峯を廻はつて二萬哩と謂ふ遠隔の道程航程を抱へて居るが、我は釜山を過ぎて陸路を執るも、全然海路直航するも共に千哩に満たざるの形勢に在るのであるから、地利の得失、行動の遲速、我は半月の内に在つて彼は半歳の外に在るの狀態、其の勢の相及ばざる甚遠しと謂ふべしだ。露國の爲政家

策源府も此の理合を悟らねばないから開戦後日夜連続西比利亞鐵道の線路修築改造及び事務更革刷新を行ふて其の輸送力を増加し爲めに送兵進軍頗る敏捷に運んで日本の豫想以外に出でたることであるが如何に考へても右に述べたる通り彼の地理上の不便利は真に大なるものであるから其れ敷の事では追附かず彼必死の盡力も我の堂々たる海運力に及ばざれば日を経月を重ねるに従ふて増兵率は愈々我に劣ることゝ成り開戦の初に於ては我の數萬なるに比して彼は數十萬を有したりしに中程以後に至りては彼我の軍勢相伯仲することゝ成つた。

第三節 地理に關する精神的影響

以上は地理に關する有形上の利否論換言すれば如何なる事情の之に加はることありとも動かざる絶對的得失論であつたが是からは其の有形的若しくは絶對的利否得失より自然に由來する國民及び軍人の心理上の影響即ち人情の弱點として到底免るべからざる無形的又相對的損益論に就ひて話するのであるが英獨米國民の如く人間到處有青山で世界を以て住家と心得る者は本國との距離如何に因りて事業に對する思ひの異なることは極めて些少なるべき筈なれど其の然

らざる國情民習に在る者は國の内外地の遠近に因りて進取の氣象奮發の趣向に著大の差別を生ずるものである。乃ち滿韓地方の如き彼より見れば極東の異域殆ど國民の全體が其の狀況を聞知せざるものから前に第一政治上勝利の原因論中に説明したる通り勝敗如何に拘らず戦争に對する國民の熱心を求むる能はず反つて非戦論を激發すると共に國外萬里の遠征と謂ふ一條より自然に誘發する特殊名狀し難き諸感想即ち疑懼恐怖嫌惡等を惹起するものであるが面の當り其の事に従ふべき軍人に在りては尙ほ更と謂ふ所だ例へば日本人の死を恐れざるの勇氣は英米人に比して幾層倍の上に在るも生國を去つて異境を開拓するの氣象は亦幾層倍の下に在るのである。其れで露國軍人にして既に死を決し骨を戰場に暴すの覺悟ある者も猶ほ前順の悲況に沈淪して懦氣の萌すものだから致方がない。波羅的艦隊の將士などは別して然様であつたらしい。然るに尙ほ此處に特に露國軍人に這般の感想を強からしむる二三の事情が存在して居る。其れは彼等多數の軍人は教育の程度低く且つ海岸線短き國の住民當然の結果として對外思想發達せずして日本は如何西比利亞滿韓は如何薩張知らぬ者等で殊に國內に在りて

さへ旅行移轉の制限束縛を受け、且つ業務竝に處世の性質上、熱居的なるが爲め習慣第二の天性を爲して郷里を離れ遠國に行くのを何よりの苦痛と感ずる農民出身であるから、懷郷の念頗る強く、遂に長く戰場に在るの勇氣を阻喪せしめ、敗北に敗北を重ねても南滿洲よりは哈爾濱へ、西比利亞よりは本國へと成丈近寄るのを希ひ、作病さへ連りに行はれたと謂ふ調子だから仕方がないではないか。之に反して我日本軍人は一葦帶水呼べは應へんとする目先の地に出立てば善かつたのであるから、如何に海外の思想幼稚なる者でも前記露國軍人の如き感想を起すことはなき筈、况や晩近海運業の進歩、外國貿易の繁盛、對外思想の發達、地理教育の効果に由り、滿韓の事情は善く曉知して居るのであるから、三、四十年前に東海道五十三驛を重ねて江戸行をしたるにも及ばざる氣安き思ひを爲すのである。然れば軍人中或は生來在府縣外の旅をしたことのない者もありて海外の出征は多少不安の思ひを爲さんかなれど、其れ位の思ひは軍人元氣や忠愛の精神や、雖過家門不入の義理やで壓し摧くことが出来よう。殊に遠くは二千年近くは三百年前後二回の征韓役、又更に近く明治二十七八年の日清戦役に従ふて我祖先竝に父兄の骨を埋め

たるの地、而も十年此の方彼等の幽魂は中空に彷徨して安んずるの地底なく、瞋目切齒して西天を睥睨するの邊に出征すること、就中出征軍人の一部は、曩日己等が一歳の間戰場として跋渉蹂躪したる既知の方面に再征することなれば、其の不安の念少くして而も勇奮の氣燃ゆるが如きものある宜なりと謂ふべし。斯の通り我は進取の氣象旺盛にして彼は退却の眞情抑ゆべからざるものあれば、彼我勝敗の岐るゝ豈亦已むを得んやである。地利の効果も亦著大なりと謂はざるを得ず。だ。這般の事理は無形にして其の實量を現示する能はず、殊に心理的作用の誘動に屬するものだから如何程の勢力あるかを計算すること困難なれど、其の意外に多大なる影響を受けたることは、捕虜の言や各種の情報やを綜合して歸納的に講究すれば容易に了解の出来ることであらう。

第五章 軍事上勝利の原因

軍事上勝利の原因と謂へば戦略戰術及び軍政上勝利の原因であるが、斯の問題は頗る複雑錯綜して居るから、一見明瞭なるが如く概括的の論評を爲すことは甚困難に思はるゝ。何故かと云へば軍事的智識の幼稚なる人々に對して至極詳細なる

説明を要するのみならず、問題其れ自身の包含する所の事項頗る多岐に亘り、相互關鍵する所特に深きものあると共に、其の各事項に附帶する理論の講究材料たる事實が同處同時に存在せずして、多くは諸處幾回の戦闘に散布して居るからである。然れど亦其れ等の事實より歸納して簡潔に本戦争に終始共通する抽象的論理を發見することが絶対的出來ぬと謂ふ譯ではない。是即ち私の左に逐一講究せんとする所である。

第一 制機先

是に於て先づ第一着に注目すべきものは日本が戰略上機先を制したと謂ふ點であらうと思ふ。斯の點は唯に兵法家の華々しき議論の材料たるに止まらずして、實地の得失論として更に一層の價値を生ずる事件たること、又古今の戦史に於て幾多の適例を見るのみならずして、今回の戦争に於て特別偉大なる効果を呈したる勢力なりしこと固より疑を容れざる所である。何故かと言へば、機先を制すると、第一敵の備整はざるに乘じ我全力を以て彼の一小部分に當ると謂ふ利益あること、第二敵の兵勢を挫き我士氣を引立つると謂ふ効驗あるとの二點に於て最重要な

る元則であるからである。斯の元則は我に機智あり準備あらば如何なる時如何なる處でも行はるゝものなれば、今回戦争の各部分一として之が活用を挿まなかつたことはなき程で、總じて戦争の秘訣は第一着制機先に在ること疑ふべからざるの事實であるが、其の最顯著なるものは、殆ど今回の全戦争の運命を決したとも考へらるべき。我日本軍の極初陸海戦に於ける敏捷活潑なる行動であらう。即ち明治三十七年二月八、九日の旅順口並に仁川港外の海戦及び同五月初旬に於ける鴨綠江沿岸地方の陸戦に臨んで、我日本は最善く機先を制し、敵の戦備が完成せざるに先ち、乘敵虚で彼が油断をして居る處へ向け不意に打懸けたのだ。其れで海戦に於ては敵の大戦艦數艘を撃破すると共に、痛く彼の心膽を挫き怯懦畏怖の念を起さしめ、其の後は丁度平維盛の二の舞で、風聲鶴唳に驚き遁逃恐縮是本能とするの悲況に墜落せしめ、陸戦に於ては敵が計畫通り兵力を滿韓の境上に集中するの前、我は晝夜兼行進軍を續け、彼の偵察搜索の前衛兵を逐掃ひ、要處々々を占領して難なく鴨綠江まで駆附け、江幅廣しと言へ江水駛しと言へ、九連城鳳凰城に在る敵軍の微勢なるに乗じて一撃を加へ、次ひで普蘭店を奪取し、南山の勝利を博し、敵を南北

兩地に切斷し、旅順の要塞を孤立せしめて亦右海戰同様の効果を得ることに成つた。然るに斯の制機先の有形無形の効果は唯に以上の諸點に止まらずして尙ほ他に直接間接種々様々に發現して居るが、其れ等は別に題目を設けて順次説明することゝしよう。

第二 制海權

制海權は古今の戰役に於て頗る重大なる地位を占めて居る。西洋で謂ふと先づ昔時ビュニク戰爭に於て最初はカーセージの優勢なりしこと、殊に其の名將ハンニバルが伊太利に入つて十五年間、疾風の枯葉を掃ふが如く進撃又進撃羅馬の諸豪傑をして戈を釋くの邊なき慘狀に陥らしめたるにも拘らず、其の後本國との通信絶へ悄悄として半島を去らざるを得ざるに至つたる所以、又羅馬の弱勢を回復し、更に有名なるシピオをして單刀直入カーセージの中都を衝かしめ、遂に之を破つて地中海に覇たるの基礎を置きたる所以のものは何か、是全くシ、リー島附近制海權の得喪如何に存するのである。次に近時拿破崙戰爭に於て、稀世の英雄が歐洲全土の力を以てして猶ほ不思議にも眼前の一小島國を持て餘し、切齒扼腕地歎太

踏みながら如何とも爲す能はず、後世子孫數百年の大業一朝の露と消へ、昨日の榮華今日の夢、哀れ果敢なくも萬乘の尊位を失ひ、五尺の形骸は遠く絶海の孤島に眠るの悲劇を演ずるに至り、ルイ第十四世以來富國強兵列邦をして羨仰措く能はざらしめたる佛蘭西の其の地位を英吉利に譲り歐洲諸國の現勢を作成せしめたる所以のもの、亦全く北大平洋制海權の得喪如何に存するのである。東洋で云ふと魏吳蜀三國鼎立時代最強大なる魏主も赤壁の水戰に大敗して以來氣勢頓に挫け、江水の盛長を見ては我雖有武夫千群無所施也と歎し、波濤の洶湧するを眺めては嗟乎固天所以限南北也と恨みたるが如き、又豊臣秀吉が天資豪邁雄圖大略深遠之計策千里之眼光依つて以て朝鮮を伐つや、加藤、福島、長曾我部、小早川等の勇將智將を備へ、十五萬の大軍威風堂々猛虎の群羊を驅るが如く、八道の山河爲めに動き草木爲めに靡くの勢であつたにも拘らず、唯一つ九鬼嘉隆、脇坂安治、加藤嘉明、藤堂高虎等の率ゆる海軍が對島水道に敗れ、全羅水軍節度使李舜臣の距つる所と成つたので、海陸併進の大策茲に挫折し、懸軍長驅して敵の死命を制するに至らず、遂に既成の戰功も水泡に屬し、折角の大望も畫併に歸したるが如き、是亦全く制海權の得喪

如何に原因したのである。

今回の日露戦争に於ても亦彼我斯の如く勝敗の顯然と相別るゝに至つたのは、固より制海權の得喪如何に因るので、世界海戰戰術家の一人として名聲噴々たる北米合衆國のエイ、テイ、マハン氏の高教を受くるまでもなく、古今の戰史を繙き交戦兩國成敗の跡を詮考して今日に推し及ぼす時は容易に悟了することを得るのである。即ち我國は初發の海戰に於て敵の海軍力を打撃し、對島水道の南北に絶ち切り、旅順口及び浦鹽斯德港の二個所に逐込めたから、時に或は遼東の沿岸を脅し我包圍軍の一部を牽制したることあり、或は日本海及び大平洋に漂ひ出で海運業を威迫することありしとは謂へ、手負猪の暴ばれ位で別に大勢に影響を及ぼすことがなかつたから、我作戦運動は豫定の如く進行し、數十萬噸の運送船は、日本海、朝鮮海峽、黃海及び大平洋を僅々數艘の軍艦に護衛せられ、或は全く護衛なくして自由自在に往來することを得て、戰場に於ける人馬、兵器、彈藥、糧食、被服、陣具、資金、其の他の軍需物品及び材料の補充が遺憾なく行はれたると共に、我内外の航海貿易事業は格別の打撃を受けず、或部分は寧ろ却つて平時よりも盛に行はれたる位の形勢

であつて、一般經濟上財政上の困難を導くことなく、上下擧げて軍國の大事に専らなるを得、益々奮つて右の所謂補充事務を準備實行したから、我は内地に於て又戰地に於て共に國力及び兵力の全部を活動せしむるを得た。其れで設令總體の力量に於ては敵露に較べて必しも優勢なりと謂へないにもせよ、緊要の時機及び場所に臨んでは常に優勢を維持して居つたのであるが、是即ち彼我成敗利鈍の著しく懸隔したる所以であつて、小國の大國に對する場合に臨んでは最善く斯の筆法に出でなければならぬ。然れど這般の道理は惟り今回の戦争に於てのみ知らるべきものではない、近く明治二十七八年の日清戰役遠くは希臘對波斯戰役などを見ても直に明瞭なることと思はるゝ、尙ほ制海權得喪の效果如何は、彼我の地位反對の場合を考ふる時は益々明瞭なるを得る譯であるが、以上の説明よりして推究の出來ることであるから、今茲に私の話を挿むことは差控へた。

第三 優勢の戰鬪力

優勢の戰鬪力と謂ふは交戦地殊に戰場又殊に戰線に於ける兵力の優勢なることを意味するものであるから、如何に本國に於て、又策線の中道に於て、其の又前後緩

急相及ばざる程の遠隔地に於て優勢なる兵力を有したからとて、優勢の戦闘力ありと謂ふ譯には行かぬ。然る處斯の優勢の戦闘力がなくては、強國の名ありとも決して戦に勝つことが出来ない所以は敢て長々と説明するにも及ぶまいが、唯茲に云ふべき事は常に我日本軍が露國軍に較べて優勢なる戦闘力を有して居つた一條である。其は如何なる次第であるかと言へば、開戦前若しくは開戦の當時若しくは開戦後暫時の間滿洲に現在したる日露兩國の兵力を比較する時は彼は我に幾倍幾十倍して居つた。然れど其の多くは北滿洲及び西比利亞地方各所に駐屯若しくは守備して居つたので、馬賊の警戒、鐵道の保護の爲め、又は道路險惡、兵站不備の爲め集中運動を盛大に迅速に行ふことが出来なかつたから、彼の戰場殊に戦線に於ける兵力は我に對照して幾何か劣勢であつた。是即ち彼の敗北が特に著大なりし所以である。凡そ兵勢の分散は古今兵家の最も忌む所であるが、殊に近時の如き訓練の充分に行届きたる、武器の完備したる、戦術の進歩したる時代に於ては兵力の集中詳言すれば所要の時機並に地點に優勢なる戦闘力を備ふることは、作戦の行動上頗る緊要の業務に屬するのである。其處で兵力とは何ぞやと尋ぬるに、第一

着には兵數の多少であらうが、唯之のみでは極狹義若しくは皮相の兵力である。廣義若しくは眞實の兵力と謂へば、之に加へて(一)人馬の強弱能否、武器の大小精粗及び軍需物品材料の準備如何より(二)帥府、軍隊、艦隊及び經理、衛生機關の編成組織並に行動の銳鈍如何と謂ふ諸種の勢力を包含するものである。斯様な工合であるから、例へば鴨綠江の會戦に於ても、彼我の兵數を云々せぬとした所で、我兵力は慥に彼に優つて居つたから注文以上の好結果を得たのだ。是に於て敵に成つて見ると旅順口の要塞及び軍港の保持如何の利害問題が起つて來、我に取りては斯の問題の解決如何に依り、策戦上重大の關係を及ぼすことゝなる譯であつた。開戦前或知名の軍事家兼政治家はアレキシーフの軍略家たるを否とは、旅順口を棄つるか否かに依りて知らるとまで斷言した様であるが、實に其の通りで、此等の營造物在りし爲め兵力を分遣するの必要を生じ、大に兵力の集中を妨げたものである。彼の時若し露國が思ひ切つて旅順口の守備兵を引上げ、之を鴨綠江岸に集中し、山河の險要に據りて優勢の戦闘力を活動せしめたる時は、陸戰の勝敗は前後を通じて容易に測り知るべからざるものがあつたであらう。又同時に旅順港の艦艇、圍艦、舢艫相

銜んで對島水道を過ぎり、浦鹽斯德艦隊に合併し、鹽大澳、柳樹屯、大連灣の如き上陸地點なき浦鹽斯德方面に兵勢を集中し、時機の到るを待つて常陸丸、佐渡丸、遭難の洋上に推し出し、自國のマカロフ、米國のマハン、其の他世界戰術家の異口同音に唱導する所の所謂攻撃なる者を實行したらんには、海戰の勝敗も亦固より測知すべからざるものがあつたであらうのみならず、又従ふて彼我制海權の得喪上地位を換ふるが爲め、其の後の海陸諸戰にも如何なる影響を及ぼしたのであらうか、想像するだに寒心に堪へざる次第である。

第四 守勢及び攻勢、要塞及び軍港

守るは攻むるの始め、攻むるは守るの助である。守るの守、攻むるの攻、換言すれば守勢之守勢、攻勢之攻勢、此等を絶對的に用ふるときは、若し幸にして全然の失敗に終らずとするも、猶ほ多大の不利を招くものなることは、兵家の説の一致する所と謂つて善からう。其處で守勢之攻勢、攻勢之守勢と謂ふことが、軍學兵法の奧義となつて來る。今斯の戰略戰術上の大元則を、日露戰爭に擬裝して見るに、兩者成敗利鈍の岐る、所以の理勢直に明白と成つて來る。何故かと言へば、日本が大體攻勢にあり

ながら猶ほも機に臨み變に應じ守勢を執るに反して、露國は元來守勢に在りながら、或は常に守勢之守勢に甘んじ、或は時に攻勢之攻勢に出たのである。凡そ攻勢と守勢とは戰略戰術の上根本的に異なる道程に位置し、策戦上著大の差別を生ずる譯なれど、英將智將は對敵行動上殊に行陣用兵の形式上其の孰れの戰勢に在るかを表さず、従ふて兩戰勢より自然に生じ來る所の得失利弊を巧に取捨するものである。是即ち守勢に在つて時に攻勢に出で、攻勢に居つて偶々守勢を執る所以であると思はる。其れ故日本軍は時機並に地形を顧慮して堅固なる防禦陣地を築設し、或は簡易なる掩堡を開掘することあれど、終始攻勢の精神を失はずして戰機の熟することあり、攻勢移轉の利を見ることあり、前方の地區占領の必要を悟ることあらば、其れ等の陣地掩堡は弊履を棄つるが如く、何の惜氣もなく後に殘し置き直に挺進して次の良陣地好掩堡の築設開掘に取掛るのだから、益々進んで益々勝ち、寧ろ意外の好結果を收むること、成つたのである。之に反して露軍は鴨綠江戰の一敗以來益々守勢に傾きながら、時に或は政治上の理由に出で、或は不完全なる偵察搜索の結果に誤られ、或は軍氣振作の必要上よりして徒に狂勇に驅られ純然

たる攻勢之攻勢に出でたることあり、又重々の敗北に懲りて専ら守勢之守勢を執り、構造不完備なる陣營堡壘を無理無體に守り詰め、進攻の機有つて之に乗する能はず、抛棄の要有つて之を斷する能はず、因循姑息遂に壁破れ溝埋れるに至つて後始めて倉皇狼狽遁逃退却することあれば、敗北の慘憺激甚なりしこと固より當然の事と謂はなければならぬ。

一般守勢の利害論は右述べたる通りであるが、今是より守勢の最も純粹なる防禦の最も完全なる形式即ち要塞及び軍港に就いて説くこと、しよ。要塞と謂ひ軍港と稱するものは唯に裝飾物若しくは威嚇物でなく、對敵行動上固より重要な地位たるに相違なければ、其の未だ充分の設備を施さず外界との連絡安固ならざる場合、即ち絶對的完備の程度に至らざる限りは全く其の特色長利を發揮するに至らずして、寧ろ或は前に論究したる通り兵力の集中を妨げ遂に全軍大活動の支障と化すべく、或は遂に右に述べたるが如く全軍をして單純なる守勢に甘んせしむるの動機となるべく、其の設營準備の進むに従ふて著しき利弊の相伴ふことあるものである。所謂難攻不落の名城要塞にして而も本軍と氣脈相通するの實力と

手段とを有するものに在りては、若し其れ相應の弊害が在るとするも其の利益が甚大であるから、先づ可なりとせんか、若し能く然らずして而も日本軍人の如き勇敢死を恐れざる者に對する上に於ては、唯其の弊のみを受けて終はるものである。其れで此等の觀察點よりしても露軍の旅順口を引上ぐることは寧ろ大に利益であつたかと思はる。之を要するに以上縷々陳説したる通り露軍が或は十八世紀式の受動的防禦に甘んじて、徒に二三の人工物を唯一の頼みとし大勢の推移する所以並に士氣の衰へ行く所以を遺忘し、或は時に軍事的原因に由らずして毫も策戦上の系統なき狂勇に馳せ反つて多大の損害を蒙りて退却し、或は在滿洲の全兵力を集中して優勢なる戰鬪力を組織すること能はず、此處に敗れ彼處に挫け轉々して漸次兵力の消耗を來し、或は早晚陸戦の命運をも決定すべき威力ある制海權を失ふて日本の策戦並に交通を自由ならしめたるが如き、悉皆直接若くは間接に機先を失したる所以に基因するのである。宜なる哉、先者制人後者被制於人の格言あるや。

第五 防禦工事殊に旅順口及び浦鹽斯德と各

私は是から右の所論題目の側面的竝に裏面的觀察とも稱すべき二個の大問題を講究することとするが、其の一は旅順口と沙河戦及び其の以前の諸戦、浦鹽斯徳と奉天戦との二關係論である。私の考ふる所に依ると旅順口陥落以前に於ける諸戦即ち鴨綠江戦以後沙河戦に至るまでの諸戦は皆悉く旅順口救援の計畫に出でざるものはない。成程善かれ悪かれ旅順口を保持すると確定した以上は最終まで其の戦略を固守せなければならぬ、途中よりして之を見棄つると云ふことは到底出來ない相談だ。數萬の人命、數億萬圓の設備竝に財物殊に同港内に封鎖せられたる十數萬噸の艦隊、又更に東洋一の名城と看板掛けたる要塞及び軍港を抛棄すると謂ふことは設令軍事上幾何程の必要あるにもせよ、人情の固より忍ぶ能はざる所況や其の保持如何は内外の威信に絶大の關係あるに於てをやと謂ふべき所である。露西亞國の策戦府も固より愚者のみの集合ではあるまい、先づ開戦の當初に於て旅順の保持問題は多少矢筈敷論せられたること、思はるゝが、其の時既に斷乎たる處置を能くせざつた位だから開戦後に於て其の大英斷の出來よう筈がない。

其處で無理無體に之を維持保有せんと決心したから、前にも言つた通り一般に彼の在滿洲全軍の大運動を掣肘し、一方には開戦の前後共之に要する人馬器械其の他軍需諸材料を補給するが爲め西比利亞鐵道の輸送力を濫用し、本軍の補給業務を怠りて常に兵力の補充に苦ましめ、他方には其の名城救援の爲め、軍事上甚價値なき都邑を中心とし、不利なる陣地を根據として、幾回となく無益の大敗戦を重ねしめて猶ほ覺醒の機なかつたと謂ふ有様である。

次に浦鹽斯徳と奉天戦との關係も亦旅順口問題と善く類似して居る。唯時期の前後あるよりして相互に關係對手を異にすると云ふに過ぎぬ。尤も沙河戦及以前の諸戦目的の一部分が遠く浦鹽斯徳の保持問題にも淵源して居つたか否の議論はさて置くとするも、大體南滿洲維持殊に奉天の大戦争の目的が主として浦鹽斯徳の間接又は遠大の副防禦たること、即ち日本軍を他人の土俵場に牽制するの方略であつたことは多少の軍事眼を有する者の容易に悟り得る處であると思ふ。何故かなれば萬一露軍策戦府にして彼得大帝の瑞典王查列斯第十二世に對したる手段に習ひ、道路を毀ち田野を清めて日本軍の北進を抑へ、曠日彌久彼自分免許の豫

想たる日本國財政困難の實現を待つか、或は亞歷山第一世の佛國皇帝拿破翁第一世に對したる故智を襲ひ、敗績の態を装ひ伴り走つて哈爾濱に退き、嚴寒飢餓及び最後の戦を以て日本軍を根底より破壊するか二者其の一を以て長利と考へたことあるにもせよ、其の然る能はざりし所以のものは前の諸題目中に掲げたる種々の事情ありしことや、三度に一度の勝利はあらうから此の次はどうか此の次はどうかと空頼したることや、諸種の原因が存在して居つた外、更に浦鹽斯德を愛惜して之を保護しやうと考へたことが其の主要なる原因である、何故かと謂へば、(一)若し連戦連勝破竹の勢で猛り狂へる日本軍の北進を抑へ手持無沙汰の状況に置く時は、其の兵力の大部分は直に浦鹽斯德に向けらるべく、(二)道路毀壞田野清掃の手段を以しても日本軍の活潑なる北進は阻止することが出来ないかも知れず、(三)伴りながら北退するの時は日本軍は之を逐ふて進撃し來り、而も中途例へば長春附近よりして道を東方に轉じ露軍を中斷して策源地と浦鹽斯德との連絡を斷つ様に成べく、(四)日本軍が其の注文通り北進せずして、矢張(二)の場合に於けると同様の運動に出づるか計られず、孰にしても浦鹽斯德を攻撃せらるゝに至らん、然様成

つては大變だ、其の戦時政治上軍事上の影響丈でも固より旅順口の喪失に優る次第だが尙ほ更に敗殘艦隊十數萬噸の最終隱遁處を無くすると共に、萬一にも交戦中之を回復することが出来なかつたならば、講和條約締結の際に於て永久割讓とならなければならぬ、果して然らば新に租借權を得て戦争の原因と成つたる旅順口とは事違ひ、從來安穩堅固に領有して數十年來西比利亞全州並に同鐵道の死活點となり、又隊の東洋艦隊の第一根據地として東亞露領の位置面目及び價值を代表したる最重要關係に在るものだから、何は兎も角多大の犠牲を拂つても之を固持保全することにしようかと決定した、然るに浦鹽斯德は旅順口に比較すると其の軍事的設備は寧ろ不完全であつたのみならず、旅順口の運命危きを見て後又旅順口の開城、上村艦隊の威赫砲撃後及び我北韓軍の豆們江に近寄れる後は別して恐怖心に驅られたから、一方には滿洲全軍の大必要をも排して西比利亞鐵道を虐使し、武器材料其の他の軍需品を輸送し、他方には其の充分の補充業務をも許さなかつた滿洲本軍をして南滿洲各地不利なる形勢の下に於て餘儀なき戰闘を續けしむることゝ成つた次第である、是に於て私は斷言する、彼の國幣を傾注し國力を消

盡したる幾億萬圓の大設營殊に東洋艦隊さへなかりせば、兩軍港殊に旅順口は拋棄せられ或は後々回復せらるゝことゝなるべく、又兩軍港殊に浦鹽斯德なかりせば彼の滿洲本軍は初より幾何ばかりか活潑なる運動を爲し、奉天は愚か遼陽が鴨綠江でも彼の様な無殘な敗衄を招かなかつたであらうが、憐れ我日本艦隊に對しては稍々劣勢なれど、猶ほ萬一の勝利を望み得べき位の艦隊及び一般列國就中清韓などに對しては非常の効力あれど、然も猶ほ世界唯一の強兵と謂はるべき日本軍に對しては實に價値少き軍港並に要塞を有して居つたことが露軍に災したのである。秦を亡ぼすものは秦なりと、敢て問ふ露西亞を亡ぼすものは果して何であらうか。

次は二大問題中の其の二即ち露軍の慘憺たる敗衄と城塞堡壘其の他の人工防禦物との關係論である。私は臆面なく謂ふが、彼の不斷の敗戦は全く堅固なる陣地を諸所に多く築設したからだ。旅順口及び浦鹽斯德の事は此處に重ねて云ふの必要はないから、唯其の他の防禦物に就ひてのみ云々することゝするが、一體運動戰に於て堅固なる陣地若しくは防禦物を工作するは餘程考へ物である。我を知り敵を

知り之に従ふて其の堅軟の程度を考慮し而して其の工作に取掛らなければならぬ。凡そ堅固なる人工防禦物は安心他力、依頼の弊害を生ずると共に、尙ほ更に、要塞軍港に就ひて謂へる通り軍事活動上最も忌むべき愛惜の念を起すものである。其處で露軍が各地數多の防禦陣地を設備したことは偶々以て全軍の將士をして或程度の自惚他力的勇氣を作り、安心依頼的態度を執らしめたる効驗はあらうが、同時に或程度以上最終に至るも屈せず曲らざるの剛氣硬度を失はしめ、死奮の精神を壊滅に歸せしめ、此の陣地も今迄支持したが最早致方がない寧ろ次の後陣地に移ることゝしようと言ふ思念を勃發せしめ、遂に豫定の退却てう巧妙なる名義を作つて之を濫用し、其の更に甚しき者は司令官が所謂豫定の退却を期圖せざる中早くも其の事あるべしと推測し、善ひ加減に外形を裝ふて其の命令の至るを今か今かと待つと謂ふ調子と成つたから、我日本軍の手強き攻撃に遇ふて支へ切れざりしは固より當然の理勢である。次に又軍事上既に己に價値を失したる人工の防禦陣地を重要なる意味なくして愛惜するのは一般人情の然らしむる所なりとは謂へ良將の決して採らざる所、一度其の習慣の軍中に瀰漫するの日は殆ど救策

のないものである。抑も攻勢に在つて遞次古き陣地を棄つるのは進取の氣象盛なる所以、守勢に在りて終始之を死守するのは志操の堅き所以なりと謂はるれど、二者其の一に居る能はずして徒に之を愛惜するのは全軍の協同的動作及び齊一的運動を妨ぐるの基たるのみならず、復更に狐疑躊躇無益の損害を受けたる後阻喪したる士氣を抱ひて敗退するの悪因と成るのである。之を要するに露軍は退却して隠伏すべき城壘、遁逃すべき西比利亞大陸を有することであれば先づ大々の前水之陣と謂ふべきものだ。之を以て我日本軍が堅固なる人工的防禦物なく、又二三回の敗戦と共に早速渺々漫々たる大海の濱にまで追詰められて進退維窮するの境遇、即ち頗る冒險的なる背水之陣に比較する時は正反對の地位に在るのである。其處で今彼我勝敗の由つて來る所の理勢を索むれば孫子の所謂陷之死地而後生、置之亡地而後存乎と、其の反面たる安之生地即死、置之存地即亡乎との兩作用に外ならぬことと思ふ。

論者或は露軍の防守設營を爲したるは必しも直接現場に勝を望む所以ではない。畢竟するに日本の強兵を無機材料の力で撃殺し漸次其の戦闘力を破砕して自然の衰憊を致さしめ、依つて以て累世相傳の一種奇妙なる所謂最終の勝利なるものを得んと企てたのである。往昔支那戰國の辯士秦の張儀は六國諸侯に向つて、齊與魯三戰而魯三勝國以危、雖有戰勝之名而亡隨其後、是何也、齊大而魯小也、秦與趙四戰而趙四勝、趙之亡卒數十萬、雖有戰勝之名而國已破矣、是何也、秦彊而趙弱也、と説ひて居るが、日露の交戦も一步を誤らば丁度斯の大小彊弱説に近寄るのであつた。其處で今日の結果は兎も角として、單に露國の奥深き胸底に潜みし計謀を窺へば右の明説に外ならざつたことであらう。即ち彼は設令露軍の極東戰場に置ける損害が日本に優ることありとするも、國軍兵力上の損害さへ相對的に少き以上は、所謂最終の勝利なるものを得べきこと、信じて居つたに相違ないと曰ふであらうが、若し果して眞に然りしならんには實に御挨拶の仕様もない話だ。通俗的頭腦を持つた者ならば成程と相槌を打つかも知れぬが、苟も一片の軍事思想を有する者ならば到底賛同の出來ない見解だ。何故かとなれば、二千年前なる周末七國時代の思想其の儘で、輓近文明の戦略を解かんとするのは以ての外のことだ。武器戦術の進歩は築城陣法の進歩に優つて居る。換言すれば攻撃術の研究は防守法の研究よりか

遙に精しく成つて居る。其れで攻撃軍の交戦初半期に於ける損害は如何に大なりとするも、防守軍の其の後半期に潰走して追撃を受くる際の損害に比較すれば幾分一にも當らぬものである。然れば西比利亞鐵道の輸送力が現時よりは數層倍大きくして歐露の陸兵を思ふ様迅速に運び得たる場合はいざ知らず、敢て然る能はざる現状の下に在つて而も敗戦の損害は右の通則以上であつたにも拘らず、日本は敏活盛大なる兵力の輸送を行ひ其の損耗を補填して尙ほ餘りあるの有様なるを實見しながら、露國策源府の算劃が若し萬一にも論者の見解通であつたとすれば其の愚や實に及ぶべからずと謂ふべしだ。

第六 文と武

文と武との關係は政と戦との關係である。文武政戦は車の兩輪鳥の兩翼の如く親密にして其の一を缺くべからず興廢存亡を同ふするものなれど、亦大に其の地位を異にするものであるが、然るに時としては其の親密不可離の關係に在るが爲め抽象的理論としては兎も角事實問題の上に於ては往々相接近錯綜して判然たる區劃を立つる能はざる場合多くあるので、即ち戦略と政治との接觸點に於て其の

勢を呈するを見るのである。其處で兩者の權衡を司る者處理宜しきを得ば其の利や頗る大なるものあり、爲めに戦の勝敗に論なく一般國民利福を害することなきを得べけれど、若し不幸にして文武兩般の大義に共通せざるの徒が軍國の樞機を握るの日は戦略が政治の危運を導くの理は今茲に云々せずとするも、政治が戦略上の要務を害するとは争ふべからざるの論理にして而も之に關する多くの實例が存在して居る次第だ。其處で孫子は將在軍君命有所不受と謂ひ、前漢の名將周亞夫は軍中聞將軍令、不聞天子詔の陣營法典を置いたのである。孫子及び周亞夫の身上、殊に宮中と政府との領域判明ならざる場合に在りては兎も角、今日一般の原則として敢て此等の言葉を文字通りに解釋するならば固より語弊あるのみならず、復實地に臨んで大なる故障を生ずるに相違なければ、其の一を將在軍政令有所不受と更へ、他の一を軍中聞將軍令、不聞政府命と改むる時は餘程平穩に聞ゆる様に成り、又政令若しくは政府命を更に政治上之干涉に換ふる時は一層意味が活動して來るのである。專制政體並に專制政治思想の堅固に行はれてある國民狀態の下に在りてすらも猶ほ右に述ぶる通りの勢に在るのであるが、まして現今の如く

立憲政體並に立憲政治思想の盛に流動する社會組織の上に於ては、輿論は政治に影響し政治は軍事に關鍵するが爲め、戰略と政治との連絡を權ることが重要な職務と成つて來る。其處で我大日本帝國憲法には、學者の大權事項と稱呼する主權者親裁の政務範圍を設け、宣戰、媾和、軍機、軍令事項などは此の範圍に入れてあるから、戰略が輿論の影響を受けざることは謂ふまでもなく、又一般政務との關係、換言すれば戰時大本營と中央政務との關係も決して混雜を來すことはない。又實際に於ても然様であつた。是に於て次に起る問題は、戰時大本營と滿洲軍總司令部及聯合艦隊司令部との關係が如何なる状態に在りしかと謂ふことであるが、設令私が知つて居る部分ありとするも、軍事秘密に亘るから今茲に説くことが出來ない。唯外面の形狀より見て最も圓滑であつたと謂ふ丈に止める外仕方がない。又軍機軍令發動の結果より推測すれば、然様謂ふのが真相で、少くとも然様謂ふと同一の効果を奏して居る。之に反して露國に於ては專制政體でありながら、立憲政體にも優る立憲政治思想、否寧ろ官僚政治の弊害、躡居して、廟堂の上富強を恃み、尊大驕慢なる文官連と、策源府中文明時代の軍事的智識、闕如せる武官輩とは相合體して無謀

の進撃論、粗笨なる戰略論を爲して、閩外の將軍を掣肘するの有様となり、又民間に於ては輿論の濫發とも稱すべき言論動勢、跋扈磅礴して政府の方針を左右した。其の結果、施ひて軍國の大事作戦の計畫にまで影響を及ぼすこととなり、遂に露軍總司令官クロバトキン氏をして、旅順口及び浦鹽斯德救援の爲め、並に政府苟安、民心鎮靜、偶然の一勝、中外に對する威信殊に支那人向廣告の爲め、心にもなき攻勢、勝算なき進撃に出でしむるに至つた。是即ち露國政治上の理由に由り進撃を餘儀なくせられたとて、世界の軍事評論家がクロバトキン氏に幾分の同情を寄する所以である。其れで開戦前に於ける露國々内の状態は、千八百七十年戰役前に於ける佛蘭西の状況に餘程似寄つた所があるので、其の狂亂粗暴なる開戦論の優勢なりし點などは殊に然りと爲すと云ふ所である。而して愈々開戦と決したる際及び戰爭の進行中の状態は、丁度我朝保元の亂に於て、戰鬪の衝に當るべき源爲朝は衣冠干垂、趙括然たる藤原賴長の爲めに制せられ、長袖者流焉知兵哉、阿兄有略必與我同計耳と浩歎し、其の他帷幄に參するの老臣宿將は之を見て復言はざりし事跡に酷似して居る。其失敗の慘憺として右二例に髣髴たる所以のもの、豈偶然ならんや。

第七 上村艦隊

九十四

制海權の意義に就ひては戰術家の大議論ある所であるが、畢竟するに完全なる制海權と不完全なる制海權との區別に基くもので、元より程度の差文義の争たるに過ぎざるものである。然れば不完全なる制海權は其の効力少しと謂ふの外無意味と稱する譯には行かぬ。况や甚しく不完全ならずして相當の實力を備ふる場合に於ては其の勢力効果は随分多大なるものである。之を古今幾多の實例に徴するに、極完全なる制海權を得たと謂はるべきものは實に少いが、其れ等も猶ほ作戰上少からざる影響を及ぼしたことは敢て説くまでもなからう。海上權力史論の著者マハン氏は固より這般の見解を以て制海權を説明して居るが寔に當然の議論である。然れど不完全なる制海權を得た位では時々敵の不意打に遇ひ、或は敵艦の手負猪的死傷の爲め千丈の堤も螻蟻の穴より潰ゆと謂ふ理合で思はずも意外の結果を來し、全軍の行動を破砕するに至り、或は軍事眼なき體面論一點張の議論家や、自己の生命身體財産の不安を憂ふる内國民の輿論やで漸次策戰の基礎を滅却するに至ることあるものである。現に北米合衆國南北戰爭の際、南米の殘艦一二艘が北

米の海岸を暴ばれ廻はつて貿易航海業を脅し、沿岸住民を不安ならしめ、依つて以て北米の輿論、施ひては北軍の戰時大本營をも動かした事例もあるのである。其處で露國の故名將マカロフは其の戰術論に於て極完全なる制海權でなければ其の効果がないと謂つて居りし調子、又其の意見通りを實行せんとして遙々旅順口に出懸け來り、彼の敗殘艦隊を寄集めて最後の決戰を試みんと企劃しながら、憐れ其の機に到らざる中意外の戰死を遂げたので不完全なる制海權は如何程まで薄弱なるものなるかの證明は出來なかつたが、是亦一廉の高論卓説と謂はなければならぬ。

然れど不完全なる制海權も所謂制海權に相違なく、相當の効果を供呈するのであるから、一度之を得れば固く失はざるを要すると共に其の保持に關する決心と方略とが大切に成つて來る。殊に其の制海權の地位が設令軍事的觀察に於て完全なるも通俗的觀察に於て不完全なる時は猶ほ矢張然りと謂はなければならぬ。即ち右マカロフ流の戰術家や、米國南北戰爭の實例様の事ありて制海權の効力を滅殺せられ、或は遂に大機を誤るに至ることあるからである。其處で一の研究問題と成

つて来るのは、日本海を戦前殊に浦鹽斯德艦隊の跋扈時代に於ける上村艦隊の地位であるが、當時我日本聯合艦隊は日本海、朝鮮海峡、黄海及び大平洋に於て、軍事的觀察上先づ完全なる制海權を得て居つたと謂はれようが、通俗的觀察に於ては正に然りと斷言することが出来ない状態であつたから、右の米國の二の舞で滑稽なる言動云爲を演せんとした者もあつたけれども、策戰の帥府は申すに及ばず有識の國民は泰然として助かなんだし、豪傑マカロフも早く死んだし、旁々以て何事もなく経過し得たのである。然れど文武の調和(政論の爲め大作戰計畫が動かされざつたこと)軍港的利益艦隊なる移動防禦を以て對島水道を扼したから、恰も之を廣大なる軍港に代用しながら固定防禦の弊を避け、専ら其の利を收めた様のもとなれること)攻勢之守勢(本隊大運動の爲め竝に攻勢移轉の前提として暫時守勢を執つたこと)優勢の戰鬪力(敵艦が軍事上價値なき部分に跋扈するからとて驚かず専ら北方海面に勢力を集中したこと)を全ふして、次に來るべき陸海大策戰の目的を達するに於て、一個の上村艦隊は重要な任務を果したので、今日の戰勝ある所以のもの、蓋し其の力多きに居ると謂ふべしだ。

第八 健脚(行軍力)

拿破翁は、健脚が戰勝の要件であることを謂つて居るが、實に其の通りで、日本人は總體に健脚である。元來山地育なれば平地住の露西亞人に比較すると脚力の數層倍強健なることは固より論なきことだ。其れで滿洲東部南部の山地殊に險惡なる道路、否寧ろ道路なき峰嶺溪壑を何の苦もなく跋渉して、豫定の大計劃に參加し、車馬の力を藉る能はざる丘阜岡陵を縱横に疾走し、斷崖絶壁を攀登して敵の意外に出でたれば奏効殊に著しきものがあつた。更に又之が爲め手易く一翼を渤海灣頭の平地に進めることを得、遼陽戰を始めとして大規模の半平地戰を開くことゝ成り、其の勝敗に就ひては内外の軍事評論家を惱殺しながらも、猶ほ矢張充分に兵士の健脚を利用することを得て奏効更に前日に倍蓰するに至つた。何故かとなれば、戰場は遼河以東に限られて居るから、太子河、渾河及び遼河左畔の平原を謂ふても、然程に廣くはない。然れば斯の平原にては固より戰鬪面の數十里に亘れる大軍の運動を自由ならしむることは出來ず、必や一翼を山地に據らしむることゝなるのであるが、是寧ろ日本軍の幸で、少くも戰場の三分なり五分なり七分なりは前に述

べたる山地戦の好運、健脚の利を得ること、成る譯だ。況や我軍は開戦以來の實驗即ち右山地戦の好運、健脚の利に任せ、比較的少數なる兵力を用ゐて敵の兵力過半を山地方面に牽制し、依つて以て他翼の敵勢を薄弱ならしめ、其の弱點に向つて晝夜兼行一瀉千里の速力で突撃を行ふたのだから、單に戦術上の勝利のみならずして、兼ねて戰略上の勝利をも思存分に得ること、成つたのである。我黒木軍が痛く敵を恐怖せしめたる固より主として將帥の善謀、部下の勇敢なるに由るとは謂へ、亦大に斯の健脚に負ふ所あるべしと考へらるゝ。現に西洋の觀戰客が日本の散兵運動の活潑敏捷なるに驚ひて居るが、其は固より雨後と飛來る敵彈を物とも思はぬ勇敢なる氣象に因ること大なりとは謂へ、畢竟するに斯の健脚が少からざる原因を成して居るのである。

第九 機密圖書、多數俘虜、偵察搜索

機密圖書は申すまでもなく、策戦行動上甚重要なるものであるが、露軍は常に敗北して機密圖書を我軍に委したのであつたから、其の軍事秘密殊に作戰計畫を察知せらるゝこと、成つたのである。一時的必要に出でたる計畫にして其の實體たる

事件が過去に屬する場合は、然程の損害なしとするも、若し不幸にして其の一部又は全部が將來に屬するものなるか、或は將來多少の變更を加へて再用せらるゝものなるか、或は固定の條例、規程、教範、勤務令若しくは訓令論達様のものなるかの時は、遺失して敵手に落つるの損害は、幾何計か量り難きものがあるのである。之に反して我軍は終始連戦連勝で敗殘の陣地を敵に見せることがなかつたから、彼が如き損害を招かなかつた。加之彼は敗軍の結果何時も多數の俘虜を我軍に委棄したことであつたが、俘虜尋問の未得たる諸材料は悉く信用するに足らず、悉く信用すれば俘虜の言なきに如かずと謂はれようが、猶ほ多數の俘虜を取調べ、其の調査諸材料を綜合して相共通する件々のみを採り、依つて以て歸納的に事實の真相を索むる時は、出鱈目なる囁語中時に我資益と成るものがあるであらう。殊にポーランド地方出身の軍人にして非戦主義に左袒して居つた者等は、定めし好材料を與へたこと、推測せらるゝ。之に反して我軍人の俘虜となれる者は、多くは重傷を負ふて人事不省に陥り、遂に心ならずも其の状態に至れる者のみなるべければ、古の豪傑伊金灘ではないが、亦同じく新羅王餓予臂肉の意氣込であるから、秘密に屬

することは死すとも口外せず、且つ又大戦闘後でも、敵の俘虜となれる者は極々小數に止まること、殊に其の中大部分は下級の軍人にして高等司令部の作戰計畫に通せざる者だから、萬一四方山の雜談の末不知不識軍事に言及することあるも決して機密を口外するに至らざるべければ、敵に取つて何等の利益をも見出すことが出来なかつた。右の次第であるから露軍の狀況は善く我の知る所となつたが、我軍の位置、兵力、動靜は少しも彼に悟られなかつた。其處で此の點に就いて尙ほ一つの注意すべきことが思出さるゝ、其は即ち彼我偵察搜索の巧拙論であるから、先づ此任務に重要な關係ある彼我の騎兵論を試むることとするが、凡そ武器戰術の未だ進歩せざる時代に於てこそ騎兵は最恐るべきものなれ、今日の如く數千米突の射撃効力を備へたる銃砲部隊の位置及び兵數を表示するの恐れなき微煙火藥、數里の外水禽の驚き起つのを認め得べき望遠鏡、高山の嶺を超越し幽邃の壑を瞰下すべき輕氣球、迅速なる交通機關、殊に無線電信機などの發明せられたる世態に臨んでは、如何に騎術に巧なりとも如何に勇敢の譽ありとも、文明時代の精神教育並に科學教育が完備せざる者では何の役にも立たない、且つ騎兵と歩兵との戰闘力を

比較すれば恰も槍と劍との優劣の如きもので、兩方共素人の場合は迅速なる運動力を有する者が勝つことであらうが、若し其れ熟練したる者の間の争闘と成つては必しも然様無雜作に斷定する譯には參らぬ。沈着したる歩兵の射撃に對して騎兵の到底敵し難き所以は、固に戰術上の斷案にして又數多の實例の範を示して居る所であるが、まして軌近機關砲なる利器の發明せられたるに於ては尙ほ更と謂ふ所だ。然れば哥薩克騎兵が如何に強勢であるからとて、之を以て勝敗の全部なり要部なりを決定せんとするは時代後れの戰術と謂はなければならぬ。彼が今回の戰爭に於て前日の威名を失墜したからとて決して怪むに足らぬ。畢竟するに這般の事情は、文明の軍事教育不完全なる彼を近世戰術上騎兵當然の價值以上に評價して居つた錯誤に原因するものである。其れで眞實正當の範圍内に於て彼我騎兵の優劣論をすると、哥薩克騎兵は頗る騎術に巧妙なるを得て、勇名世界に轟くとは謂へ、元より近世の軍事教育なく文明の戰術を知らざる暗愚の者等であれば、若しや其の馬力に於て又兵數に於て又更に騎術に於て彼よりは遙に劣等なりとするも、善く時機を得場處を考へて行動する智勇兼備の我騎兵に比較して奏効大に及

ばざる所ある寔に當然の義と謂はなければならぬ。然れば騎兵の重要任務のたる偵察搜索運動に於て彼は單獨若くは小部隊の場合に在りては地形地物利用其他の智識缺乏の爲め、又大部隊の場合に在りては進歩したる武器器械機關戰術等の威力に制壓せられ、熟練したる歩兵の沈着なる射撃に脅迫せられし爲め、充分の働きを爲さなかつた。之に反して我騎兵は其の完備したる普通教育及び軍事教育より出づる智識を活用し、諸般の障害を排除して緊要なる任務を立派に盡したから、我軍情は秘密を保たれ、敵狀は詳細に聞知せられ、策戦上至大の便益を爲したのである。

第十 黒色、灰白色、カーキ色

黒白の差とか、黒白を別けるとか謂ふ言葉もある調子で、黒色は頗る目立つものである。其れで軍艦が戰闘準備をする時は灰白色などに塗り換へるものであるが、彼の波羅的艦隊は然様しなかつたから、漂氣の變遷たる朝鮮海峡に於てすら容易に發見せられて、非常の損害を受けた。次に灰白色は海上に於てこそ其の水色に髣髴たるが爲め、物體を隠すに便利なるものなれば、我日本も日本海、の海戦に之を用ゐ

て便益を得た様の次第であるが、陸上に在りては必しも一般に最も有利なるものと謂ふ譯には行かぬ。何故かとなれば、土砂岩石の色合は永久不變なれど、猶ほ黒赤黄白等種々あり、樹木草葉の彩色は様々一定せざると共に、四季に依て紅綠變化するものである。其れ故、黒白の二色の如きは勿論の事であるが、其の他の色合なりとも總じて鮮明なるものは、何れの土地か何れの季節かに臨んで特に目立つことゝなるのである。畢竟するに這般の事理は生物進化哲學上で謂ふ動物の模擬性保護色の理論に類するものであるから、若し善く物體を隠伏せしめんと思はば、四邊の彩色即ち土壤季節に原因する光彩色質に適合しなければならぬことであるが、人界に在りて多衆の團體若しくは多大の物體を動物界の保護色模擬性然らしむることは到底出來ない相談であるのみならず、殊に敏活なる運動を爲すべきの必要ありて、南船北馬常時地を換へる軍隊が、四季共通して隠伏に便利を得んとする場合に於ては、必や一般の地物の色合に考へ、四季の山色に鑑みて唯成べく目立たぬ色を求むるの外致方がない。其處で灰白色などは先づ一通不可なきものであるから、露西亞は之を軍裝に用ゐて居る譯だが、尙ほ此の上にも一層適當のものを發

明しなければならぬ。然に白色の夏衣袴を着けたる我日本軍人は明治三十三年北清戦役の際各國軍人の服色を目撃したるに由り、又専ら敵の目標となりし不利を受けたる實驗より、又更に韓紅の血潮に衣袴を染めたる悲惨の光景を面の當り見たるよりして、一般の地物四時の景色に考へて所謂カーキ色なる者を採用し、種々調査の末先づ之を夏服に用ひて居つたのであるが、今回の戦争に當り特に滿洲各地諸般の光景に参照し、早速之を陸軍色として遞次一切の軍用品に用ふることと成つた。實に斯のカーキ色は禿山蜿蜒數里に亘り、廣漠たる平野總て黄土常盤木なくして全森林紅葉する滿洲の秋色其儘と謂つて善い。此地に於て斯の服色で、日焼けたる黄色人種が多くは秋季に活動したものだから、前述の地物摸擬の保護色位ではなかつたかも知れぬ。現に西洋の軍事評論家が日本軍隊の其位置及び運動殊に各軍人の身體を隱蔽するの巧妙なるに驚歎して居るが、是豈偶然ならんやである。

第十一 散兵戰術、隊附將校、夜間戰鬪、負傷者運搬

散兵運動は文明時代最良の戰術である。是固より敵火の猛勢を避けて我損害を少くする方法に外ならざれば、如何なる兵種も必要に應じて使用すべき譯なれど、

其の最も多く利用せらるべく、且つ此の度の戦争に於て特に列國殊に敵軍の注意を惹きたるは歩兵の散兵運動であるから、今此の處に於ても主として斯種の散兵運動を講究することとした。凡そ歩兵の戰鬪隊形と謂へば密集方式か、散開方式か二者其の一に居らなければならぬ。其處で矢筈議論も生じて來るが、兩方式とも各長短ありて絶對的得失論を爲す譯には行かない。地形竝に戰鬪の狀況如何に依りて各利害を致すものであるから、宜しく諸般の事情を參酌して適當に活用すべしと謂ふ處である。是に於て如何なる程度まで各方式を尊重するか、如何なる場合に於て兩者の中孰れを使用するかと謂ふ事實問題が起つて來て、容易に解決の出來ない有様であるが、各國は其れく自から研究の結果操典中に使用の程度と場合とを指示して居る。其處で日露兩國は如何と謂ふに、前者は主として散開方式を用ふるに拘らず、後者は主として密集方式を用ふるのである。然る處今回の戦争に於て後者は其の非を悟り大に前者の執所を參照することゝ成つたが、其は戰役の半程を越へたる遙後の時期に屬する様だから、設令善く改革を施したりとて相當の利益を供するの運びに至らざつたであらう、まして年來久しく金科玉條として

尊重したる方式及び習慣を、一時の機會で倉皇狼狽輕ろくしく變更したるものだから、偶々以て一般將士の頭腦を錯亂せしめ、怯懦の氣疑懼の心を惹起せしむるの惡結果を導いたかも知れぬ。

歐洲晩近の或戰術家は實戰に於ける散兵方式の効果を疑ひ、抑も危險の狀況、悲慘の光景を目撃して恐心哀情を生ずるは人類の通性であるから、悲慘に對する哀情を發作せしめざる爲めには夜間戰鬪を以てすると共に、危險に對する恐心を滅殺する爲めには密集隊形を以てしなければならぬと説ひて居るが、成程一應の道理がないでもない。然れど我日本軍人の如き恐心の發動は忠義の精神に抑制せられ、哀情の萌芽は愛國の勇氣に斷絶せらるゝと謂ふ者に任りては右の疑念は無用と謂はなければならぬ。畢竟するに文武之政職在于方策、用之與不用存于人で、兎角軍人其の者の精神技倆次第で何事も其の效果の程度を異にするものである。其れでこそ、運用の妙は一心に存すと謂ふ所以だ。抑も法術や兵器や共に死物であるから、如何に巧妙銳利なりとは謂へ使手が惡しくは何の役にも立たぬものである。現に旅順沖及び日本海々戰に於ける日本軍水雷の效果に就ひて、歐洲列強を驚かした

ことであるが、恰も腕前が出来て居つたから名刀の切味が充分に顯れた様なものである。其れで散兵戰術も亦同じく、日本軍人が用ふると其の効力を遺憾なく發揮して來るのである。今這般の事情を一層具象的に説明すれば、散兵隊形は近世武器戰術の進歩したる、殊に銃砲の如く破壊力大なる飛道具の使用せらるゝ時代に在りては最良の戰鬪方式たるに相違なけれども、固より各人個々の意思を以て自由なる運動を爲すもの、則ち獨斷專行を以て好機に投じ、千變萬化する戰鬪狀況に適應し、千種萬様の地物を利用して動作すべきものなれば、士卒に服從、義勇、敢爲の精神備はり、各自責任を重んじ、義務を盡すの誠心存すると共に、其の任務を果し得る智識殊に軍事教育完備するでなければ、唯に其の効果を發揮することが出來ないのみならず、反つて大なる弊害を簇生するものであるから、露軍々隊の如く將校出でざれば士卒進まず、隊長倒るれば其の隊は潰亂すると謂ふ調子では斯の種の運動隊形を執ることが出來ない。然るに我日本軍人は其れ等の誠心、精神、智識及び教育が充分に出來て居るから、輕裝にして體軀四肢の自由なる、獨斷專決にして意思の自由なる活動を爲し、散兵戰術の效能を遺憾なく發動せしめ、密集隊形に在る敵

に對して充分の損害を與へたのである。現に泰西の兵家は一般戰闘に於ける日露兩國損害の差著しく、又殊に要塞戰に於ける日露損害の古今幾多の實例に徴して割合に妙きを聞ひて驚嘆し居る様子だが、彼我戰術の相異殊に我散兵方式の有利なりし所以に原因するものと謂つて善からう。

散兵運動は獨斷專行の部分多しとは謂へ、其は極小範圍に於ける自由意思の活動である。軍隊の常經として絶對の不干渉あるべき筈なく、數十人、數百人の小部隊に對しても一般に指圖すべき多々の事項あるは固より云ふまでもない事、況や原則として命令服従の關係に在るべきものなればと謂ふ所であるのみならず、士卒の及ばざる所を補ひ、過ぐる所を抑へ、士氣を振作し、活動を援助し、依つて以て各人各個の技能を充分に果さしむると共に、全隊の齊一的運動を遂行し、更に進んでは一般の戰況殊に上級部隊の計畫と行動とに適應せしめなければならぬことである。是に於て乎始めて幹部なる指揮官を要する次第となるが、這般の目的を達するに於ては隊附將校が最も重要な位置を占めて居る。凡そ軍隊の強弱は上司、令長官より下兵卒に至るまでの責任であるけれど、特に散兵運動に於て上級の命令意圖

を機會に投合せしめ、下級の働作を教導補益指揮監督するの主任は隊附將校に在つて、散兵運動が前に縷々説述したる通り戰闘動作の要部並に又勝敗の由つて岐るゝ所の集點にして然も指揮監督の困難なるものなりとせば、隊附將校の地位は實に輕ろからざるものと成つて來るのである。約言すれば彼等は恰も軍隊の幹骨にして、戰術上至重至大の關係に在る者と謂ふべし。然る處我軍隊は武士道の精神を磨き近世の科學的智識を具備し、善く前述の重任責務を盡すべき隊附將校を有するにも拘らず、一般に不完全なる露軍は、更に又無智不能にして無責任不規律なる隊附將校を以て組織せられてあつたものだから、戰闘働作上一般に不利無効の事多かつたのみならず、殊に最有利有効なる散兵戰術を用ふることが出來なかつたから、彼我勝敗の著しく岐るゝに至つたのも寔に已むを得ざる次第である。序ながら茲に附説し置きたきは夜間戰闘と負傷者運搬との二件である。抑も夜間運動なる者は訓練の行届きたる軍隊で、指揮宜しきを得ねば出來ない。斯の點から謂つても、隊附將校は重要な位置を占めて居る。聞説我日本軍は夜間戰闘に於て特に巧妙を得、隊伍の運動靜肅敏活に行はれ、敵は中宵夢深くして突然枕邊に日本軍

隊の銃聲を聞き、刀劍の音次ひて臻るの有機で、殊に拂曉大部隊の忽焉として眼前に出没するのを見るのであつたから、警戒勤務に多大の戦闘力を消耗したと謂ふとであるが、是亦我隊附將校の功勞に歸する所以である。次に又露軍は負傷者の運搬に妙を得て居る、其結果戰場に死屍を遺棄することがないと謂つて驚歎したとであるが、必しも彼が特別に然る所以の技能を有するのではない、畢竟するに戦友が各個軍律を犯して居たからである。總じて猥りに戦線を離れて後方に退くは、其事情の如何を問はず皆軍律上の大罪人である、何故かと謂へば、其行爲が一般の秩序を紊り士氣を解體せしむるの不都合あるのみならず、又實に其事の爲め數多の戦闘力を滅殺するからである。然れば斯種の犯罪は善意に出るにもせよ、又惡意に基くにもせよ嚴密に防がなければならぬとであるが、此責任に當る者は即ち隊附將校でなければならぬ、然る處散開隊形の場合に於ては此種の犯罪に關する隊附將校の監視責任は殊に煩を加へて來るが、露軍隊附將校は前述の通りであつて到底其の任に堪へざるの結果多くは密集隊形に在るにも拘らず、這般の弊害は續々と生じ來り其取締に苦しむで居つた調子であるから散開方式の善く行はれよう筈がない。

其れで露軍は負傷者運搬に關する損害と、並に之が爲め主として密集方式を採らなければならざりし損害とを併せ考ふる時は是亦相當の敗因を成すのである。

第十一 將帥、大決心、建制部隊、海陸軍協同

古羅馬の政治家シセロは大陸軍の理想的將帥の資格條件を掲げ、職務に忠實にして大英斷あり、其の行動要點に適中して統一的建設的技術あることと説ひて居るが寔に千歲朽ちざるの名言である。其處で英國の印度總督キツチナル將軍が「將帥たる者は其の地位に適應する能力を有し、先づ之を發揮して部下の信頼を得ねばならぬ、然らずんば一朝有事の際に當り充分の効果を擧ぐることが出來ない」と謂つて居るのも正に理想的將帥論の傳統に外ならぬのである。是に於て我大山總司令官以下の諸將帥が前顯の資格及び能力を有し、全軍の欽仰瞻望する所となつて居つたか否は軍事行動の効果より觀察して容易に悟了せらるゝことである。之に反して露軍の將帥は總司令官クロバトキン氏を始めとして、皆善く我大山總司令官以下の諸將の如くなるとしや實に疑なき能はずである。例へば露軍に取りては開戦以來の好運とも謂はるべかりし黒溝臺の狂言の如き、奉天戰に於て彼の左翼は優

勢なる兵力を有しながら最後まで退守主義に甘んじたるが如き、僅に各將帥相互の意思疏通せず威信缺乏して居つた證據である。殊に又大機に臨んで斷乎たる決心なく徒に狐疑躊躇して好運を逸し或は日本軍の活潑なる運動始まるや直に倉皇狼狽して作戰計畫を動かし、或は時々部隊の位置及び任務を轉換して將士を奔命に疲れしめ、或は部隊の建制を毀壞して亂雜なる用途に充つるが如き、戦時最忌むべき愚策を執りたることも亦同じく、露軍各司令官が將材なきの結果である。是に於て大に講究しなければならぬ一大事件が出て來るが、其は何かと謂へば海陸兩軍の協同働作論である。

陸海兩軍は無形的に精神的に將又作戰計畫の上に於て共通の事件に協力することあるは勿論、其の所謂各個特別の任務なる者に至りても亦同じく軍國大策戰の一部たるに相違ないのである。其處で今其の協同働作を分別して見れば、一般的大策戰的協同働作と、特別的又各作戰的協同働作との二つとなるが、前者は或は我制海權を得て敵の海上輸送を妨げ、陸兵の補充を阻止し、或は軍港背面の要塞を占領して敵艦の根據地を奪ひ、軍需品の供給を絶つが如き其の重なるものにして、後

者は或は陸戰隊を組織して沿岸の一角に上陸地點を設くるが如き、或は海岸城塞の威嚇砲撃の如き、或は交通機關を破壊して海陸の通信交渉を遮斷するが如き、或は港灣の封鎖を監視するが如き其の重なるものである。此等の協同働作が完全に行はるゝでなければ大作戰行動は出來ないのである。我日本は大本營の大策戰著々當を得、陸海の將帥和協一致して、此等の一般的並に特別的任務を遺憾なく遂行したから、今日の勝利を得ることゝ成つたのであるが、之に反して露西亞の陸海兩軍は前述の如く各個の内部に於てのみならず、又更に兩般の關係上に於ても共に要位に在る諸將帥が不和軋轢したから、旅順の軍港及び要塞戰に於ける失敗を始めとして慘憺たる最後を遂げたのである。斯の點は軍國の大策戰上又各期の大作戰上共に重要な地位を占むる事件なれど詳細に説明し始めると際限がないから餘は諸君の常識に委するの考で省略したのである。

第十三 兵器、彈藥、器械、武技(教育)、衛生、經理、兵站、

内地諸機關

兵器は日露兩軍各一長一短あり、ではあるが、我兵器は概して堅固精緻而新式齊一

に出来て居るから、艦船、銃砲、彈藥、械器等就中日本式艦型、山内鋼鐵、下瀬火藥、小田式水雷、有阪砲、伊集院式信管、卅年式歩兵銃、木村式無線電信機など其の移動力、破壊力及び機能力が適當に整備して各種其れれの大効驗を發揮すること、殊に小部分の劣勢なるが爲め全軍の行動を妨げざること、成つて居つた、斯の點は一口に云ふと然程の効力關係も無さそうに思はるれど實に偉大の價値を有する事柄であるが、兎角説明が各事各物に亘るので、一々説明を加ふるは餘り繁に過ぐる事、又殊に露軍は文武官僚腐敗の結果、戦用品の所定方式及び員數を缺いで居つて作戦上意外の故障を來したとの風聞もある次第で、斯の點に關する彼我の優劣論は餘り力なく思はるゝことだから、先づ此の位に止めて置ひて、寧ろ前題の兵器中其の重要なるもの、運用論、即ち我國固有の武士道的精神及び近世の科學的智識を基礎とせる軍事教育の結果たる我軍人の技能論に移ることゝするが、我日本軍艦は既に云へるが如く、噸數、艦型、構造、速力等が敵に比して遙に齊整して居るから操艦が幾分か容易であつたでもあらうが、元來我軍人は四方環海の國に生れ、海事思想發達して居る上兼々の教練が精達し、操艦は敵に較べて著しく優等であつたから

我嚴然たる陣形を保持し、縱横自由に運轉して敵艦隊を四分五裂せしめたのである。又同時教練の結果我は司砲射撃の術に長じて命中正確であつたから、我度胸を据へ効驗愈増に盛なると共に一發直に敵の心膽を砕くの勢であつたにも拘らず、敵彈は高く空を打ち遠く海中に落つるの有様で我に對しては幾何の損害も與へなかつた、凡そ海戦に於ては砲撃か、水雷か、衝艦か總じて破壊力の使用種類少きことだから、我砲術の巧妙なりし事は早速戦況を決定するの効力があつたのである。次に陸戦に在りても亦砲力は重要な地位を占め、勝敗の數に大なる影響を及ぼすものなることは云ふまでもないが、我砲兵は矢張陣地の撰定、距離の測算、照準の正確なる事、殊に敵の拙くして用ゐ得ざりし間接射撃巧なりし事に於て大に優つて居つたから、暫時にして敵の防禦工事を破壊し、歩兵進撃の通路を開き、依つて以て全軍の勝運に絶大なる奏効を爲したのである。

次に工兵隊、鐵道隊、電信隊、架橋隊の技能即ち作業に就いて云ふと、此等の戰團機關が敵の防禦材料、交通業務を破碎阻碍して、砲兵の任務歩兵の進撃に協力し、敵の作戦運動並に退却計畫に支障を與へ、又我防禦の陣地城塞を造り、通信輸送の機關を

設備して敵砲の威力を殺ぎ、敵兵の攻勢を挫き、彼我状況の報告命令の傳達を迅速にし、數萬の人馬偉大の器械材料を轉瞬の間に通過せしめて我軍の計畫竝に運動に資益したるが如き大功蹟は到底敵軍に見るべからざる所であつて、亦大に戦勝に影響を及ぼしたることであらうと思はるゝ。其の次に彈藥隊、輜重隊が作戰運動上如何なる作業を爲し其の精銳なる技能を發揮したかと云ふならば、此等の後方軍隊が或は右の交通機關を利用し、或は險惡なる道路、橋梁なき河川をも厭はず跋渉して、晝夜兼行數百里の道程屋外の通夜、冬は渤海灣頭の寒風に霜雪を浴び、夏は砂塵萬丈の廣野に炎暑を凌ぎ、戦鬪上最重要物なる彈藥の古今稀なる消費に對する輸送業務に堪へ、我砲兵隊をして優勢なる射撃を續行せしめ、或は百萬の人命健康を保持すべき軍糧戎衣其の他の兵用物品材料の運搬業務に従事して、各軍戰闘員の士氣を振作したるの大効蹟も亦前記諸隊に譲らざる所にして、鐵道輸送の便ある露軍の思ひ及ばざる困難と、企て及ばざるの効果を有して居るのである。其の又次に衛生隊及野戰豫備兩病院が或は雨や霞と飛來る敵の砲彈銃丸を物の數ともせず、或は數晝夜を通じて一睡を得ざるをも厭はず、數多の負傷者並に病患者を

迅速丁重に運搬治療して容易に戰闘力を回復せしめ、内外の戦史に類例稀なる好成績換言すれば何れの戦國何れの戦時に於ても、病に倒るゝ者が敵の兵器に倒るゝ者に數倍十數倍するの勢にして、今回の露軍に在りても亦前者は後者に二倍三倍或は四倍するの情況なりしに、獨り我日本軍のみが古今唯一の事實と見做されたる類例、即ち氣候、風土、水質、生活狀態其の他社會百般の事に至るまで、殆ど自國同様の隣佛國に戦ふたる普國の事例に齊名比肩否寧ろ其の上に出出することを得たるは、慥に我衛生部の名譽たるのみならず、亦以て戦勝の由つて來る所以に外ならぬ次第である。最後に經理官、兵站業務及び内地諸機關が最盛大に運轉活動して兵力及び軍需の補給を全ふし、更に又軍後を清め、民心を填め、後援事業を指導疏通せしめたるが如きは俗人の耳目にも貫徹し易き熾々の功名ならずとは謂へ、古支那の明君が戦後の論功行賞に際して、民政官兼糧餉官たる蕭何を天下三傑の一に置き最大の食邑に居らしめたるに依りても其の地位の如何に重要なるか、知らるゝ。斯の我を以て夫の露軍の後方更に又本國が紛々擾々として兵力及び軍需の供給缺乏し、地方人民の反抗して出征を嫌惡したるが如き狀況に比較する時は、我

作戰の正々堂々として一糸紊れず一滴洩れず整然たる計畫嚴然たる秩序を保持
遂行して誤らざりし所以の原因も容易に推測せらるゝのである。

私は今茲に本章の「第五軍事上勝利の原因」論を終はるに臨み、二個の大事件を特筆
大書して賢明なる諸君の深慮熟考に委することとするが、其の一は即ち我軍事上
勝利の原因は我軍事の進歩に歸し、我軍事上の進歩は明治二十七八年の日清戦役
に基くので、日露戦役前の日清戦役は普佛戦役前の普埃戦役であると謂ふ所以、其
の二は近代の戦争は右謂ふが如く軍事の進歩に伴ふて戦略戦術も頗る擴大精巧
に達したると共に、益々一般國政、國力、國情と親密に關鍵して勝敗の原因が互に此
等の事態と盛衰消長を同ふすることゝ成つたと謂ふ所以である、然れば私が本章
中に掲げたる種々の勝因及び前各章に示したる幾多の勝因殊に又兩者の相抱合
して活動したることは、今回の特別顯著なる勝利の由つて基く泉源たるに相違な
けれども、其の更に進んで兩國大體の成敗利鈍の岐るゝ道程如何の問題に至りて
は、必や右一般國政以下諸事體が相提携して此等の所謂戦勝の原因なるものに協
力したる所以に歸着せなければならぬ、其處で私は次に二千年前の昔にありなが

ら炯眼達識善く萬世不易の大哲理を簡潔に示したる漢高祖の名言を掲げて大昆
とする。

夫運籌帷幄之中、決勝千里之外、吾不如子房。填國家、撫百姓、給餽餉、不絕糧道、吾不如
蕭何。連百萬之衆、戰必勝、攻必取、吾不如韓信。此三人者、皆人傑也。吾能用之、此吾所以
取天下也。

日露戦争 勝利之原因 因終

明治四十年四月二十五日印刷
明治四十年四月三十日發行

日露戰爭戰勝之原因

定價四十錢

著者 藤村守美

東京市麴町區平河町四丁目一番地
兵林館支配人

發行者 橫尾民藏

東京市赤坂區田町五丁目十一番地

印刷者 齋藤裕

東京市赤坂區田町五丁目十一番地

印刷所 齋藤活版所

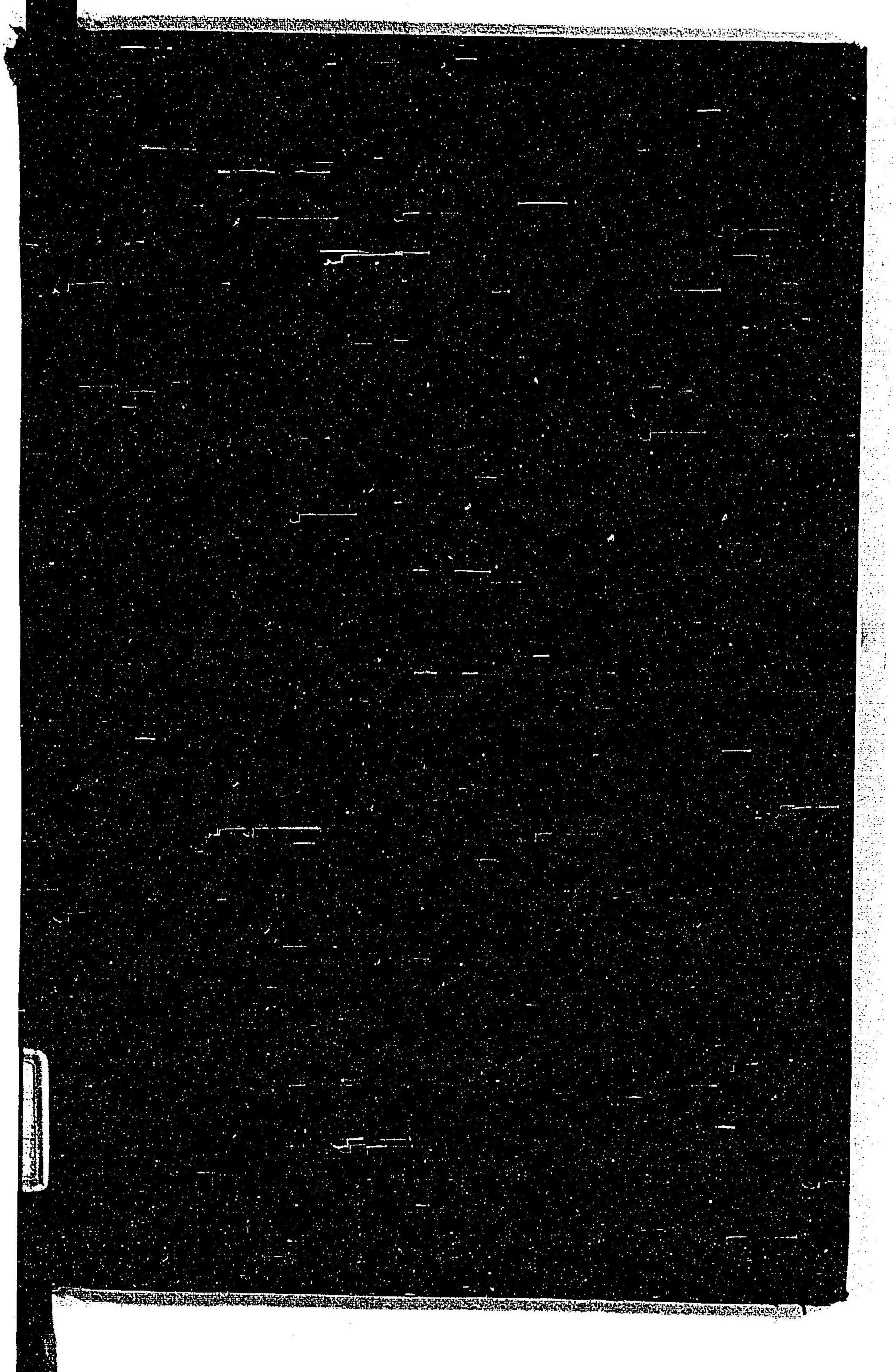
不許
複製

東京市麴町區平河町四丁目一番地

發行所 兵林館

42
272







002890-000-9

42-272

日露戦争戦勝の原因

藤村 守美/著

M40

ACB-6449



